

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第49巻第3号 2014年3月

Journal of OKAYAMA SHOKA UNIVERSITY

Vol.49 No.3 March 2014

《論 説》

リッカートの超越的当為—転移するロゴス(2)

九 鬼 一 人

2. 超越論的観念論～心理的当為

〔第一節 リッカートとディルタイ・人間学的接点〕

リッカート哲学の基本スタンスを、——ヘーゲル流の客観的観念論から立ち戻ったカント的「超越論的観念論」¹として描く。そしてヴィンデルバ

1 リッカートの『限界』では、『認識の対象』中の理論的価値があまり議論されていない。文化科学的認識を扱う『限界』では、「歴史的中心」[=historisches Centrum, Vgl. Rickert, H., 1896-1902, S. 561, usw.] 概念が重要な位置を占めており、当該概念が次の認識論的「構図」を賦与している。

歴史家は客観的価値に対して態度をとることを通じて、研究対象（内在的「客体」のうちでも「人間」）に価値を関係づける。この研究対象そのもの、つまり「精神的存在」は価値に態度をとる。その「精神的存在」が「歴史的中心」にほかならない。歴史研究家は当該の価値を認識の基準（対象）とすることで、そうした「精神的存在」のもつ性質を記述できるとする。ただし九鬼一人、2003、67ページで、「1900-1910代の新カント派がヘーゲルの影響下において——ディルタイと並行的に——ヘーゲルの「客観的精神論」を継承するという意味をもっていた」としたのは、リッカートのヘーゲル敬遠を正確にとらえていない。

「精神的存在」、すなわち心にあずかりながら構成されてゆくものが、文化科学の研究対象である。リッカートと歩みをそろえて文化科学を構想したヴェーバーとの関係を補っておこう。ヴェーバーは、「リッカートによって強調された他人の心的生への原理的接近不可能性」(WL, S. 12, fn. 1.=ロツシャー (一) 30-32ページ。)に言及する。このヴェーバーのリッカート解釈には、誤解が含まれている。たしかにリッカートの言い分によると、自然科学的手続きをとる心理学者について、このヴェーバーの指摘は当たっている。「[すなわち] こうした根拠から自然科学的手続きをとる心理学者は、自分の心的生をもって、心的生に例外なく妥当する概念を獲得でき

ントにつらなる（なかなづくヒュームの系譜を継いだ）リッカート哲学に、カント人間学との接点をみたい。

ところで人間学を志向するリッカート哲学はそもそも、そのヒナガタをカント哲学にもっている。Christian KrijnenのNachmetaphysischer Sinn, 2001は、後期リッカートの形而上学を主題的に扱っていない憾みがあるものの、カント哲学の後裔として新カント派の価値哲学を位置づけようとする本格的な論考である。意味への問いはカントを継いで——ヘーゲル以降、——つとにKuhn, H., 1973, S. 672の指摘するごとく、脱神学化された。ただし、価値問題の解釈の変容については、Schnädelbach, H., 1983の説く〈意味→目的論→ニーチェの意味喪失〉という図式を変更することなくしてリッカートの価値哲学を論じることにはできないとも、クレイネンは言っている。

近代哲学の地平と、この新たな形而上学後の問題設定とを対照してみると、デカルトの論中、対象の対象性は自我と機能的に独立なものではなかつ

るが、……せいぜいそうしたところで、彼には〈他人のそれへの原理的接近不可能性〉にたどりつくぐらいなのである」（Rickert, H., 1896-1902, S. 533.）。とはいうものの「歴史家は他者の心的生をまさしく、その個性的特性の観点から記述」できるのである（Rickert, H., 1896-1902, S. 533-534.）。この点、向井守, 1997, 189ページの記述は、「リッカートの「他人の心的生への原理的接近不可能性」というテーゼ」に言及して、「リッカートは、人間は自己の精神生活を直接に観察することはできるけれども、他人の精神生活にはそうすることができなくて、ただ「推理の複雑な連鎖」という間接的な仕方では推測するにすぎないという理由から、原理的に他人を理解することは不可能であると主張した」としているが、これは当たらない。なぜなら因果的「説明」でない解釈学的「理解」の途が残されているからである。

瑣末な点にわたるが、「クニース（一）」でヴェーバーが、かつて消極的だった（WLS. 173. = 客観性78ページ。）「理解」概念に対して、——精神的現象の理解は、「原理的には「非合理性」が少ない」（WL.S.67. = クニース（一）139-140ページ。）と——肯定的態度をとったことは、心的生「外界と自己生との区別が意識されていない状態」という表現に現われているごとく、ディルタイへの傾倒がひとつの契機になっているのだろう（向井守, 1997, 308ページ.）。だがそのきっかけは、もしかするとリッカートにあったのかもしれない。リッカートの場合、研究者の関係づける価値は、「歴史的中心」である他者が態度をとる価値と異なる可能性もある。そのさい研究者は当の他者、すなわち精神的存在に、「入り込んで生きる」 [= hincinleben, Rickert, H., 1896-1902, S. 566.]. 結果、研究者の側の価値は、「歴史的中心」の価値に接近、ひいては合致するとする。つまり、リッカートは他者の生にテキスト媒介的に入り込み、他者の生を理解する、というのである。[なおヴェーバーの整合型理解とリッカートの交わる場所については、九鬼一人, 2008b, 第七章, 二を参考にされたい。] なお Rickert, H., 1912, S. 232. (Vgl. S. 238.) 参照。

たし、存在者の真理の原理としては、何をもってもまず cogito に言及されていた。したがって対象性は非妥当的なものであった。これが前カント的形而上学にデカルトがあずかる所以である。そもそもカント以前の神学的前提とは (Kaulbach, C. F., 1972, S. 86, 121-122. 127, 200-201.)

1. 神は生得観念をもった人間悟性を理解する。

2. これらの観念は神の思考の像である。

3. これらの観念にもとづき、形而上学的対象認識が可能になる。神に媒介された〔生得〕観念はプラトンによってさらに出生以前からのものと見なされ、それによって存在者の本質に関する、〈経験と独立の形而上学認識〉が授けられた。

この域からカントは離脱する。妥当根拠は外的法廷において把握される(他律)のではなく、理性そのものが必要かつ十分な妥当根拠(自律)であるのとらえかえされるからである。カントもアリストテレスの「しかじかということである」 [= »Daß«-Sein] と「なぜであるかということ」 [= »Warum«-Sein] を区別するかたちで、プラトンのエピステーメーとドクサとの区別を踏襲する。この問題構制に即応してカントは学的認識の概念と、根拠・理由づけの概念とを結びつけた。つまり学的認識は根拠づけられた知とされ、かくて学は、知の妥当の理由づけという課題を担わされた。

個別学問的知を保証することが原理を与える所以であり、認識の妥当規定の、評価をおのずから指示する。特に認識の可能性を問うカント以降、経験の可能性に枠づけられた原理を哲学的認識は有する。それは、個別学問的な定立的認識(原理から生じた認識)とは異なる、諸原理自体の認識を意味する。つまり公理の基礎づけがそれに当たる。形而上学以後に現われたカントの思考圏こそ、この主観性と超越論性の課題にぴったり沿うものだった。

ところで認識の尺度となる原則の妥当を、根拠づけられた知は前提する。これは以下の価値論的問題構制を意味した。すなわち価値・反価値に即して認識能力を評価することが鍵となる。悟性認識に期待されているのは「み

ずからの価値と無価値とに関する判断」である（Kant, I., A, 13/B, 26.=4 : 88ページ）。そのさい認識の主体としての「理性」へ遡及が、認識の妥当を規定する媒介項となる。可能的経験に現われる「客体」といえども、すべて所産であり、認識作用と認識主体の構成による。したがってその原則は意識のうちに求められる。認識が客観的であるためには原則・規則にしたがって方向づけなくてはならない。「この結合を規則に従わせること以上の何ごとも、対象には関係しない」（Kant, I., A, 197/B, 242.=4 : 296ページ）。かくして「諸対象はわれわれの認識に従わねばならない」（Kant, I., B, XVI.=4 : 33ページ。）というがごとく、主観性に基礎づけられた客観性が成立する。

すべての経験において必然的に前提されている経験の可能性の条件が問題なのであり、認識の主体の「理性」へと遡れる諸原則が経験の諸前提におかれ、アプリアリな原則と経験知とに種差がもたらされる。これは、形式と質料の二元論に対応する。

結局、超越〔論〕的なものはKritikとしてもMetaphysikとしても機能することになる（Zocher, R., 1959, S. 49-51, 104-106, 117-119.）。これらは一般的な形而上学と特殊な形而上学に分岐する。普遍的な形而上学の根拠にもとづいて、「自然一般」の概念規定がなされる。「われわれにとっては、一切の可能的経験の諸対象についての認識以外には、いかなるアプリアリな認識も可能でない」（Kant, I., B, S. 166.=4 : 230ページ）。かくなる規定によって対象性一般の根本性格、つまり経験一般の可能的対象の（客観的）グルントカクチャー根本性格が与えられる。——すなわちそれは直観の形式・カテゴリー・純粹悟性の最高原則を通じて規定されるのである。かたや特殊な形而上学として、自然の形而上学（経験的心理学・合理的心理学）ならびに実践哲学（超越論的弁証論・人倫の形而上学・合目的性哲学／文化哲学としての判断力批判）が並び立つ。これら形而上学に関する規定を前提としてのみ、新カント派の背景に根拠となる理論の諸連関を理解できる（Orth, E. W., / Holzhey, H., (Hrsg.) 1994, S. 11-13.）。

かくして成立した価値哲学をロツツェ経由の後期観念論とプラトンとの比較に即してまとめるならば (Krijnen, C., 2001, S. 34-35.)

1. 妥当者の妥当根拠としての基体 (主語) はもはや個別主観と一致することはない。個々の判断遂行の妥当根拠とは別に、純粋な大なる妥当が尺度の役割を果たす。

2. 妥当基体 (主語) は妥当するものであり、非-存在化される。

3. 妥当基体 (主語) は対象の対象性である。

4. それはすでに形而上学的存在論として機能しなくなった。

5. 妥当基体 (主語) は超越論的なものとみなされる (超越の意味は超越的)。

の五点に約される。

以上の問題圏にリッカートの価値哲学の枠組みが設定されている。それを同時代の哲学者ディルタイと関連づけると以下のとおりである。

リッカートには、ディルタイのいう「精神」がヘーゲルのそれと重なって映ったから、彼は価値哲学の構想で、その精神科学に距離をとった。しかしディルタイの価値は、経験に天下るアプリアリではなく、「現象性の命題」に見られるごとく経験に内在する (Makkreel, 1975, pp. 218-272. = 大野篤一郎/田中誠/小松洋一/伊藤道生訳, 1993, 218-236ページ)。

新カント派は、ディルタイの「心」といえども「存在」(「現実」の一種)と見なし、彼と距離を置いて価値を追究しようとした。リッカートは「現象性の命題」への敬意に見られるように、彼の超越的当為に心理主義的解釈の余地を残して、経験主義的傾向をとどめていた。

「GE1, S. 12/GE2, S. 19 われわれが確定したところによれば、すべての「物」は、意識の状態として把握し得る構成要素から成っているし、物がそれ以外の何かとして証拠立てるものはまるきりない。ディルタイ²

2 Dilthey, W., Bd. V, S. 90. = 3 : 480ページ。

の命名による「現象性の命題〔原理〕」〔=“Satz der Phänomenalität”〕が成り立つ。すなわち、それを一番適切に名づけるなら**内在性の命題**といえよう。[GE2, S. 20] それに従えば、私にとって存在するもの一切〔GE1ではAlles, GE2ではalles〕は、私の意識の事実である、という比べようもなく一般的な〔=allgemeinsten〕制約をうけている{。}、**学問論が意識の事実つまり意識内容ではない認識の対象を認めるとしたら、それはどのような正しい理由からなのかと、われわれは問わなくてはならない**（表記凡例は、本稿注（33参照））。

ディルタイの「現象性の命題」の趣旨は、「いかなる客観も意識の事実
に解消」可能というものである。たとえば色・抵抗・密度・重さを、それらについての感覚等に解消できる、と。とはいえ抵抗感覚から遡及するに、
印象や表象は対象に由来している。ディルタイの実在とは意識の「内=外」
で「抵抗」するものである。つまり「現象性の命題」には「現実すなわち
一切の外的事実が現象性をもっているという洞察（つまりそれら現実や事
実の一切は意識の事実であること、したがって意識の諸制約のもとに成り
立つこと）」が表現されているのである（Dilthey, W., Bd. XIX, S. 60. = 2 :
124ページ）。

その命題に即した場合でも、物自体を実在として措定するカントと同様、
ディルタイの実在は、主観の衝動に抗する「起点」に関する信念を生ぜし
める（牧野英二, 2013, 第十章, 3. 参照。）。すなわち意志インパルスがある
感覚に阻止されるなら、それから反射的に〔=反省的に〕生の起点は遡及
される。その起点は強いイミでの実在であるから、ディルタイを現象主義
と解してはならない。

ディルタイが抵抗感覚に即して〔対抗すべき〕実在を推測したように、
リッカートでも、「価値」は主観に対立するものとして現われる。ただし
あくまでも「現実」を「定立された」客体とするリッカートと対照的に、
抵抗概念を「純粋に物的な妨害というその最初の含意から、現実に対す
るあらゆる真の関係」へと転義せしめた（Bollnow, O. F., 1982, S. 23.）、ディ

ルタイとのちがいをいくら強調しても強調しすぎることはない。

ディルタイが精神科学の定礎を「現象性の命題」に求めて、構造的連関のうちにある「生の統一」を探究したのは、牧野英二の述べるとおりである。「ここではまた、「生の分節化」が説かれており、それによって精神科学の基礎づけの試みは、心理学的なレベルから生物学的レベルと拡大されている、という解釈も成り立つ」(牧野英二, 2004, 13ページ)。つまりディルタイは、自然史が記述するような「意識」の条件を、生き生きとしたプロセスに求めるのである。彼の場合、たとえば〔生の〕カテゴリーは〔カントのように、〕理論理性もしくは悟性のうちにはなく、生の連関そのもののうちに求められたことを思い出そう。というのも、いうまでもなくカテゴリーの超越論的(アプリアリナ)演繹に幾多のアポリアが待ち構えているからである。だからディルタイは、リッカートも敬意を払った「現象性の命題」をふまえ、意識の事実の学として精神科学を構想した。

リッカートにとって定立された「現実」は、その奥に根源的な異として、〈価値〉を想定する。「現実」の定立とはその実、価値の化肉³(九鬼一人, 2007/2008。)を意味する。リッカート哲学は、経験的「現実」を媒介にして価値と対峙している⁴。つまりリッカートでは、「現実」に接岸するかぎ

3 とくに中期リッカートを論じるが、超越論的心理学に限定するかぎりのいくつかの論点は、前期リッカートにも妥当する。なお前期と中期との違いについては後述するくだりを参照せよ。

4 ディルタイは、カントがわけても人間学でアポステリオリを重視したと解釈する。ところで自然存在者としての人間と、超越論的意味における人間との関わりあいも、カントにとって問題であった。そのことは、実践的問題でも感性的契機と接点をもつという論旨と符合している。たとえば自然的存在者としての人間の、具体的目的たる幸福は、超越論的主観にとって道徳法則に即すときにかぎり、追求されるべきであるとされた。『実践理性批判』Kant. I., Bd. V, S. 9, Anm.=7: 131-132ページ原注、『判断力批判』Kant. I., Bd. V, S. 434, Anm.=9: 113-114ページ原注等で、生と価値・幸福の問題が問い直されている。

そもそもカントの『純粹理性批判』のB版演繹論をひもとけば、悟性が感性に働きかけるさい、生きた〈身体〉が介入する論理構成となっている。すなわち「生産的構想力」が働きはじめる箇所、線を引くことにより「図式」を構成するくんだり(とくに『純粹理性批判』B版第二四節の「線」を引く能作を想起せよ)は、身体をもった [=körperhaft] 個人による感性的認識を前提する。——「〔感性的なものの〕無力さの所以は、創造能力に意味を賦与する能力つまり身分^{身体的分別}けが、純粹理性という

りて〔価値指定が含意されており、〕フッサールの現象学的「実在論」とも呼応している。価値が化肉した「現実」こそ文化科学の対象となる。

ところでディルタイの精神科学は、カント哲学のごとき、絶対的な出発点として人間学ではなく（筆者のディルタイ人間学の研究は、端緒に付いたばかりなので、さしあたりの場哲朗, 2001等を参照せよ）、むしろ経験諸科学と連関した斯学⁵に注目している。

ディルタイのカント解釈、なかんずくその人間学の重視を、リッカート・ディルタイの両者をつなぐ挿話として挟んでおこう。ディルタイは『アカデミー版カント全集』第三部門、手書き遺稿部門の編集にあたって、カント研究者アディケスと手紙をやりとりしている。当該往復書簡集⁵が伝えるのは、アディケスが1904年8月プロイセン科学アカデミーに提出した「カント全集第三部門についての報告書」中の、経験知をカントの哲学体系の前梯と見なすことをめぐる見解の懸隔である。ディルタイは人間学を含め、広義の自然科学をカント哲学の導入部と見なした。根拠とするのは『天界

語感のせいで、ないがしろにされてきたことに根拠をおいている」。身分けはそのものが賦活されるためには、純粹理性を超えた新たな観点へと、ひきつがれる裁量を、ふるうよう要請されたのである（Kaulbach, C. F. 1968, S. 296.）。なお中島義道, 1987, 2000, 岩隈敏, 1992, 植村恒一郎, 1989, 1993, 牧野英二, 1994らのカント論と雁行して——後で述べるリッカートの第一の主観はディルタイ—カントとこの層^{（レベ）}を共有する。〔N・ハルトマンの階層理論のごとき、物理的・有機的・心的・精神的的存在層ならば、強いて言えばこの層は第三のそれに対応するだろう。精神的意志に対する心的動機の錯綜の関係は、有機体の自律性に対する無生物界の法則性の関係と並行的である。〕

- 5 底本は、G・レーマン「カント全集の歴史—一八九六—一九五五年に寄せて」『カント哲学の歴史と解釈への寄与論稿』（Gerhard Lehmann, “Zur Geschichte der Kantausgabe, 1896–1955”, in: *Beiträge zur Geschichte und Interpretation der Philosophie Kants*, Berlin: Walter de Gruyter & Co., 1969, S. 3–26.）の付録として収録されたディルタイとアディケスのやりとりである。同論稿はディルタイの『アカデミー版カント全集』のカント全集著作部門の編集規則（『アカデミー版全集』第一巻、〇二年、所収。）・ディルタイの報告書（〇三年二月五日）も、付録として収録しているが、それらを含めて収録方法がちがう異本も存在する。〔p. 12の後に書簡1ページ目に続きディルタイ文書を収めるバージョンと、ディルタイ文書の後に書簡1ページ目を配するバージョンがある。〕初出の*Deutsche wissenschaften zu Berlin, 1946–1956*, Berlin, Akademie-Verlag, 1956, S. 422–434には、ディルタイの著作部門の規則・報告書を欠き、アディケスの書簡を収録しないばかりか、再録された『カント哲学の歴史と解釈への寄与論稿』中に付属する若干の注に言及しない。

の一般自然史』「さまざまな人種」論文等の、自然存在者として人間を描き出すテキストである。すなわちデイルタイは、1905年1月10日付けのアディケス宛手紙で、「さまざまな人種」論文（初版、1775年、改訂版、1777年）『ハルテンシュタイン版全集』⁶に参照を要求し、カントの宇宙的考察においては、自然体系（石川文康によればランベルト経由）と相関するかたちで人間学が成立する⁷と解している。「さまざまな人種」論文当該箇所とは以下のとおりである（下線ゲシュペルト）。

「私がこれらによって、予告する自然地理学は、世界〔=世間〕を知るための予備練習と呼ぶことのできる有用な大学の授業に関して、私が考えている理念の^{イデー}一部をなしている。この世界知は、他で獲得されたあらゆる学問、熟練に実用的なものを賦与するのに用いられる。それがあれば学問、熟練すべては学校のみならず生活にも役立つものとなり、見習いを修了した学生は自分の使命を発揮させるような舞台、すなわち世界へと導きいられるのである。こうしたわけで彼の前には、将

6 ハルテンシュタイン版（1867-1868, *Immanuel Kant's sämtliche Werke: in chronologischer Reihenfolge*, Hrsg. von G. Hartenstein, Leipzig: Leopold Voss, Bd. II, S. 447, unter.）の〔引用〕当該箇所は、カントの初版（1775年）にのみ見られる。欄外に印刷されていることその他、いくつかの相違がアカデミー版との間に見られる。

7 宇宙論的とは、自然と人間とを個々別々ではなく一つのまとまりとしてとらえる仕方を指す。

ここでデイルタイは、人間を包括する自然史という特質から宇宙論的見地に言及しているのであろう。たとえば、デイルタイは自然との連関に触れて、次のようにいっている。精神物理的統一性は、自然と二重の依存関係にある。すなわち自然から社会的・歴史的現実^{イデー}は因果的に条件づけられる一方、人格の王国の諸目的が自然に働きかけるという仕方^{イデー}で自然と相互に連関しているのである。その趣旨は、宇宙全体と相関的に人間のあり方が規定されるという、カントの自然科学的発想と重なっている（Dilthey, W., Bd. I, S. 17-18. = 1: 26-27ページ。）。

デイルタイは『精神科学序説』第二巻、完成原稿（1880年-90年頃執筆、いわゆるプレスラウ完成稿を含む）のなかで、「意識の諸事実に関する学は経験科学なのである」（Dilthey, W., Bd. XIX, S. 81. = 2: 151ページ。）としている。自然知、さらには哲学知を根拠づけるさい、そのような方法をとったのであろう。また、遺稿『生と認識』（1882/83年）でも「思考は生の過程において現われる」（Dilthey, W., Bd. XIX, S. 344. = 3: 575ページ。）、もしくは「生は構造である。（中略）生の反復する経過において、生の統一の分節化がより明瞭に意識され、生のカテゴリーが解明される」（Dilthey, W., Bd. XIX, S. 355. = 3: 589ページ。）のごとく、生は経験的連関のうちで統一されている。

来のあらゆる経験を規則にしたがって秩序づけることができるために、
 それを修得するさい〔アカデミー版では「それについての」〕^{ヴォーデュルヒ} あらかじめ概説を要する二個の領域がある。すなわち、自然と人間〔ハルテンシュタイン版、アカデミー版ともにボード体〕である。だが、これらの専門領域は実用的なものなかで^{コスモローギッシュ}宇宙論的に検討される必要がある。すなわちそれらの対象が、別々に含んでいる特異なもの（自然学と経験的^{ゼーレンレーレ}靈魂論）に即してではなく、対象が存していて、しかもおのおの〔ハルテンシュタイン版ではJeder、アカデミー版ではjeder〕がみずからおのれの位置を占めている関係全体について私たちに悟らせてくれるものに即して、検討されなくてはならない。私は第一の授業を自然地理学と名づけて夏学期の講義に予定し、第二のものを人間学と名づけてこれを冬学期にとっておく。この半年の残りの講義は、すでにしかるべき場所で公告されている〕（下線部ゲシュペルト）⁸。

このカント文書に見られる人間学の位置づけをめぐって、ディルタイは、

- 8 N・ヒンスケ、石川文康訳、1985、127ページ。「今日の意味での個別科学の対象は、したがって自然学や医学の対象も、練達という技術的資格に属するものすべてである。倫理学の対象は知恵という道徳的資格である。ところが、人間学のオリジナルな対象は、怜悯という実用的資格である」（下線強調）。

同様の趣旨は、『実用的見地における人間学』Kant, I., Bd. VII, S. 119-120. = 15 : 11-13ページ。『自然地理学』Kant, I., Bd. IX, S. 157. = 16 : 16-17ページ。『実用的見地における人間学』の「実用的」pragmatischの訳語について補足しておく。広義において、実践的〔たとえば『実用的見地における人間学』Kant, I., Bd. VII, S. 189. = 15:115ページ。当該箇所は夢との対比において実際に表象を創り出すという含意もある〕・役立つ・実用的〔たとえば『人間学』Kant, I., Bd. VII, S. 214. = 15 : 151ページ。〕と言われると同時に、道徳的の対義語としても使われる〔『実用的見地における人間学』Kant, I., Bd. VII, S. 234-235, S. 267. = 15 : 181ページ, 228ページ。〕。そもそも「実用的な」規則は「幸福という動因にもとづく」規則を指すことに由来する（『純粹理性批判』Kant, I., A. 806/B. 834. = 6 : 90ページ。）。思弁的・理論的・生理的 [= physiologisch]・道徳的・規律正しいとの対比において、怜悯な・器用な・目的を目指した・実践に関わるの意味をもつ。Historisches Wörterbuch der Philosophie unter Mitwirkung von mehr als 700 Fachgelehrten in Verbindung mit Günther Bien, [et al.]; herausgegeben von Joachim Ritter Schwabe, c1971-c2007, Völlig neubearbeitete Ausg. des "Wörterbuchs der philosophischen Begriffe" von Rudolf Eisler, Bd. 7, S. 1242. 普通は「実用的」と訳されているが、ギリシャ語の名詞形 $\pi\rho\acute{\alpha}\gamma\mu\alpha$ には、事実・実際・事例的行為というニュアンスもあり、ほぼ $\pi\rho\acute{\alpha}\xi\iota\varsigma$ と同意であることを念頭に置かなくてはならない。

バウムガルテン「経験的心理学」との文献上の発生的連関を見る（たとえばKim, S. B., 1994等の簡潔な概観を参照せよ）アディケスと対立した⁹。彼はカントが経験知に即すことに、学説生成史的な意義以上のものを見いだしたのである。

くわしくこのテキストとディルタイの解釈とを対照する暇はない（坂部恵, 1976, 3-74ページの先行研究を参照のこと）。カント人間学の歴史哲学的含意¹⁰を活かすのなら、ディルタイ＝アディケス往復書簡集に通じるディルタイのカント解釈¹¹は、歴史的理解と個人心理学の双方に粹組みを与える彼自身の人間学と同じ方向で了解できる（Makkreel, 1975, p. 380. = 大野篤一郎／田中誠／小松洋一／伊藤道生訳, 1993, 419-420ページ。）。これらディルタイのカント人間学～自然史解釈と関連した、リッカートの論点を挙げておこう。

第一にリッカートは、たとえば自然史 [= Naturgeschichte] という個別化

9 ディルタイはアディケスに、「貴兄が、段階の順序の根拠となさる箇所、バウムガルテンの便覧の写しにご執心の向き、皆目見当がつかません」（1904年11月30日、アディケス宛ディルタイの手紙）といっている。便覧のようなものを手引きにしていることを認めるものの、[カント学説生成史上] バウムガルテンの主導的役割を説く、アディケスに賛成していない。

なお現在ヒンスケをはじめ、アディケスの流れを汲む解釈が流布しているように見える。講義ノートに記されたバウムガルテン「経験的心理学」への言及頻度を参照のこと。

10 『世界市民的見地における一般史の理念』によれば「歴史とはかくれた自然の意図に基づいて、人間の自然的素質の完全な展開と、それを可能にする国家内外の法秩序の実現をめざす、類としての人間の歩みである、という歴史概念を成立させた。この書物には歴史における人間の営みを自然目的論に基づいて独断論的に説明する傾向が強い」（有福孝岳・坂部恵他編, 1997, 『カント事典』弘文堂, 549ページ。）

11 ディルタイはエルトマンの見解（アルノールトが異を唱えたことで知られている。）に近い。すなわち、カントの「自然地理学講義」から分離されて、「人間学講義」が開始されたと考えるエルトマンは、人間学的関心と自然科学的研究に、早くからカントがたずさわったことの意義を見だし、たとえば『天界の一般自然史と理論』の付録として述べられた「自然の類比にもとづいてさまざまな惑星の住民を比較する試み」で、生理学的人間学的探究へと向かったとする。エルトマンによれば、カント自然科学も、やはり宇宙生成論的問題から地理学的研究へとたどって研究されたという。すなわちその地理学研究は、人間学的関心に由来すると考える（Arnorldt, E., 1908, S. 348-355.）。

的自然科学¹²を、価値には関与しないが、独特な学問分野として位置づけた。

この個別化的自然科学について、リッカートは1907年の「歴史哲学」第2版, S. 370で曖昧な立場を残した。個別化的文化科学は一回限りの発展(進化)順を記述するもので、しかも価値を関係づける手続きとした。それに対して自然を扱う個別化的自然科学もあり、それは価値的な手続きをとるとも解しうる。実際「歴史哲学」第2版, 1907, S. 369では以下のように言っている。

「普遍化的自然科学のほかに、自然過程を個別化して、たとえ媒介を経て間接的であろうと、価値関係的に扱う学科がある。たとえば、有機体の発生史・地質学・ことによれば地理学がその例になろう。逆に価値関係があるにせよ、文化的生が普遍化的叙述に従うことがありうる」。

このようにリッカートのテキストには、スタンスの「ゆれ」が見られる。そもそも個別化的文化科学たる歴史学とは、以下のようなものである。

「歴史学の目的は、そもそも一回の発展系列の記述であって、それは一度きりで個性をもった歴史のうちで多少なりとも包括的な系列を記述したものである。その客体は文化過程じたいか、はたまた文化価値と関係をもっている。それによってこの歴史学は本質的に、普遍化的手続きにせよ個別化的手続きにせよ、自然科学と異なっているし、方法的にも、何らかの仕方で客体を体系的に扱う文化科学すべてとまるきり原理的に異なっている」(Rickert, H., 1907, S. 370.)。

しかしヴェーバーはリッカートに批判的態度をとった。ヴェーバーは、リッカートが個別化的自然科学のメルクマールを時空的一回性に限定せ

12 ルーは生物学における根拠の問いを、事実の問いよりも重視すべきであるとしたが、そのさい分解と合成を連続させた結果、因果的分析という外貌を呈すことになった(E・カッシーラー著、山本義隆／村岡晋一共訳、1996、228-229ページ。)。したがって歴史的方法の真の意味は把握されなかった。ビュチュリにしても生物学で因果的分析的方法と記述的方法とを仲介させたにすぎない(E・カッシーラー同著、229-230ページ。)。しかも彼は実験に記述的確認の役割を課した。エンテレヒー概念を介して形而上学的立場(生命の独自性)に踏み込んだドリーシュは、むしろ自然哲学の領域に属するから記述を省略する。

ず、むしろ彼が生物学の価値関係性に踏みこんだとして、不満を述べている(1907年11月3日付のリッカート宛、ヴェーバーの手紙MWG (II/5) S. 414-418.)。リッカートの個別化的自然科学への「ゆれ」を浮かび上がらせる「よすが」として引いておこう。——およそヴェーバーは晩年に生物学主義に接近するが、この書簡では生物学主義、個別化的自然科学への反対が通奏低音になっている。

「ご懇切にも〔「歴史哲学」第2版を〕恵贈くださいましたどうもお礼申し上げます。拝読いたしますかぎりでは先のご惠贈書と同じく|例にもれず|¹³まことに悦にいました。その叙述には、第1版¹⁴よりいっそうの説得性をもって心動かされます。わずかな箇所ではありますが、反対者に説得性をもつとはかぎらぬことがよもやあらば、それは359-360ページ¹⁵かもしれません¹⁶(私の愚考するところなるほど、その箇所も、むろん正鵠を射ているのですが)。366ページ¹⁷は場合によっては誤解されるでしょう(「社会的なもの」は「社会学的なもの」と解されるわけです)¹⁸。——とはいえそれ〔「社会的なもの」〕にしても、けだし稀少性 [= Knappheit] を避けて通れますまい。愚考するに、「個別化的自然科学」

13 以下 | | で括った斜体は、ヴェーバーの挿入。

14 ヴェーバーは「それ」を削除し、「第1版」に変更。

15 書簡表記「259-260ページ」は誤り、と全集は判断。

16 「歴史哲学第2版」の当該箇所参照。「歴史科学が、普遍妥当的成果に達するために、一般的価値を不可欠とするという事情は、価値関係の個別化的歴史学の方法と、価値自由普遍化的法則科学的方法とが対立することに、かかわりない。望むなら、もとより、こういうことも不可能ではない。いわく、「すべての学問は普遍妥当性をもつためには、つねに特殊的なものを一般的なもののもとに「帰属せしめ」なければならない」と。しかしこの言い回しは、無条件にいわれると、極めて誤解を招きやすく、いくらそういわれても、何も語っていないのと同じに決まっている」(Rickert, H., 1907, 359-360.)。なぜなら価値自由的類概念・法則概念による普遍化的帰属は、文化科学の一般的価値のもとにおくこととは峻別されなくてはならないからである (loc. cit. S. 360)。

17 書簡表記「266ページ」は誤り、と全集は判断。

18 価値関係を通じた歴史的对象の構成を、「ゲゼルシャフト的もしくは社会的な関心にもとづいて意味を有する客体のみが、歴史的に本質的なものとなるという具合に、表現する」こともできよう。「…だから、社会的存在としての人間は、歴史学的研究の主たる対象であり、それは、人間が社会的価値の実現に関与しているかぎりでは、とりわけそういわれる」(Rickert, H., 1907, S. 366.)。要するに歴史の価値付帯的ノモス性を「社会的な」といっているのだから、狭義の「社会学的」性格を指しているわけではない。

に対する反対が370ページで証明されていません¹⁹。——「個別化的自然科学」は（オイレンブルクや、今次では私たちのアルヒーフでもヘットナーその他や、チュプロフがそうですが、それら）反対者の主たる切り札です。かつて折に触れて、「かけがえのなさ」にとりわけ反対されて | 究極的には | 時空的なもの | のみ | みなして、〔個別化的自然科学を〕規定すると公に明言されたことを、しかと申し上げておきたいのです。私はむしろ貴方の²⁰立場 [=Standpunkt] に賛成いたします。とは申せ「体系的な文化科学」というのは、ほかならぬ貴方が、（はたまたラスクが）述べておられるご卓見であるとしても、愚見によれば、そもそもまさしく疑義を抱えたカテゴリーにはかかなりません。生物学を価値自由的なものと見なすといたしましても、社会学、とりわけ経済社会学にとって、控えめに見積もっても容易ならざる事態となりましょう。ここ〔社会学〕でも | 純粋に生理学的な | 生命保存の見地²¹から見て適したもの²²を有意味なもの [=Bedeutsame] として、もち上げるとしたら、〔個別化的自然学にも価値を認めるべきだと〕異議を申し立てられえますし、そうすると事情は（原理的には）生物学と同じとなります。愚考するに、その種の議論に対して、説明を要すると申せましょう。そもそも貴方が一度たりとも生物学的問題（ドリーシュ、ビュチュリ、ルー等）を攻撃なさろうとしなかったのは〔どうしてでございましょう〕？ 私と申せば、折りあらば生物学者の、周知の | （世にいう価値自由的） | 「進化」概念を批判したいと存じます。つまり「より差異のある」か、あるいは端的に「より複雑な」を「より高度の」とする「進化」概念の批判²³でございます。あたかも胚やまさしく「生殖質」等にしても、胚の「原基」 [=Anlage] 一切に伴うものは、万物のなかでもっとも複雑とは限らないことは、生物学は百も承知です。それゆえルーは、かわりに可視性の要素をすでに〔胚の段階で〕分離しています。

19 リッカートは370ページで、歴史学を「個別化的文化科学」と特徴づけ、自然科学と原理的に異なると主張した。

20 書簡表記「彼らの」は「貴方の」の誤り、と全集は判断。

21 ヴェーバーは「立場」を削除し、「見地」 [=Gesichtspunkt] に変更。

22 書簡表記「Relevante」は「Relevanten」の誤り、と全集は判断。

23 ヴェーバーは「排斥」を削除し、「批判」に変更。

ところで貴方は、たしかにこの事案で賛成なさっておられるはずです。——愚見によりますと「文化的－實在」というラスクの概念には | これまた | まったく未解決の諸問題がつきまとい——そしてその問題にゴットル²⁴は夢中なのです——解決を試みることも（当面）お手上げです。それにかかわることもさしあたりできません。とは申せ「前科学的」選択の産物のごときものは、ラスクがそれに賦与している解釈の仕方を正当化しません。さもなくば実際、ゴットルが（アルヒーフ、第二章の論文で、参照）望んでいるがごとく、ミュンスターベルクと近い意味で、二重の客観化にいたるのです。貴方と申せば目下、他の方法論的問いより倫理学に強い関心をお示しのように存じあげます」（S. 416, Z. 10まで。下線イタリック。）。

このヴェーバーが問題視した個別化的自然科学はリッカート科学論の係争点である。また一回的な自然史という概念は、カントの『天界の一般²⁵自然史と理論』[=*Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels*: 強調九鬼] 標題にも現われるごとく、カントの理論構成の前哨でもあった。

カントによれば、人のいうことを轻信したり、妄想を抱いたりすることもなく、信頼できる証拠にもとづくならば、「自然史」では作り話に迷いこまずに、自然についての正しい知識が得られるという。こうした自然史的な考察が、経験的に要請される²⁶。たとえば「さまざまな人種」論文の

24 因果的に解明しうるものを、ゴットルはそのまま論理的に推論できるとした。すなわちここには一種の自然主義を見てとることができる（WL, S. 49.= ロッシャー（一）106ページ）。

25 カントは「宇宙の機械的生成のあり様に関する一般の構想」、とくに普遍法則定立にかかわる部分だけではなく、特殊な側面にも言及していた（Kant, I., Bd. I, S. 236.= 2: 25ページ）。

26 この見地はカント哲学のアポステリオリを評価する本論ともつながる。そもそも前批判期のカントにおいてアプリオリという語の使用は経験と独立というニュアンスを含まない（山本道雄, 2008, 121-123ページ）。つまり形而上学と本来の哲学にアプリオリを限定することはできないのである。カントは経験という肥沃な低地（『プロレゴメナ』）について次のようにいっている。「高い塔とそれに似た形而上学の偉大な人々、これらの両者の周りには、普通多くの風が吹いている。しかし、これらは私にふさわしいものではない。私の場所は経験の肥沃な低地である」（Kant, I., Bd. IV, S. 373-374. Anm.= 6: 358-359ページ原注。）。経験に基底をおき、知を積み上げてゆこうとするカントには、豊かな経験と向き合う視線がある。

なかで自然史は、どんな自然物がそれぞれの場所で現在の状態に達するのに、いかなる系列の変化をこうむってきたかという考察から記述されている（「自然地理学講義要綱および公告」*Kant, I., Bd. II, S. 3. = 2:261*ページ。）。カントは、『天界の一般自然史と理論』では宇宙における地球の位置を明らかにすることをとおし、その住人である人間の「理解」を試みる。その証拠に彼は人間や他の惑星に住む生物についての空想を楽しんでいる。これらを物語るにさいして、カントは人間学的思索を深めた。

その「自然」への問いは、人間存在のリッカートの世界観学的考察に通じていたのである。リッカート晩期に属する『哲学の根本問題』をひもとけば「方法論、存在論、人間学」を副題に掲げ、実際、第三章を「世界における人間的生の意義について（哲学的人間学の諸問題）」という一章に割いている（晩期のリッカートを引証するのは、文献学上の難もあるが。）。「人間学は、人間の探究にさいして人間のみをではなく、むしろそこでのみ彼が「生きる」か、もしくは「現存すること」ができる世界全体をも、同時に考察することに〔関心を〕向けるべきなのである」と述べるように、世界観学は人間学と一体である（*Rickert, H., 1934, S. 146.*）²⁷。

かくして第二に、片やディルタイでは、カント的アポステリオリな問い²⁸が導きとなって世界「観望」〔= *Anschauung*〕の学が促された。ディルタイによれば「世界観の究極の根底は生である」（*Dilthey, W., Bd. VIII, S. 78. = 4: 489*ページ。）が、生は歴史的存在であるから「比較歴史的方法のみが〔世界観の〕類型の提示、その変動、発展、交錯に近づきうる」（*Dilthey, W., 1977, S. 86. = 4: 497*ページ。）。彼の世界観学、世界観の類型化は経験的な生の自己省察、つまり歴史の考察をとおして、ひとつの理性批判と見なされる。たとえその軸足が心理学から解釈学に重きを移したとしても、

27 ただし *Rickert, H., 1934, § 47* で述べられているように、その人間学とはシェーラー的な形而上学的傾きをもったものであった。

28 ヒンステによればカントはすでに「ブロンベルク論理学」において合理的な諸体系以外に、地理学のそれのような経験的な諸体系も認めていた。ノルベルト・ヒンステ著、宮島光志訳、1996、とくに135ページ参照。

「類型化」という処理は歴史的資料というアポステリオリを対象とする。

他方、リッカートは生の包括的解明のために「生の目標、もしくは生の意味の把握」(Rickert, H., 1921, S. 25.) をあらかじめ必要とした。つまり世界観の基礎には、指針となるアプリアリな価値があるにちがいない。したがって彼は、世界観学が価値の体系にもとづかなければならないとする。ディルタイが世界観の類型について帰納的方法を唱えたのに対して、リッカートは歴史的に開かれた資料とは別に、超時間的価値の体系を要請した。こうしたちがいにもかかわらず、世界の「観望」はディルタイ・リッカートに共通した問題関心であった。たとえば文化史に接近した世界観学を構想するリッカートを見てみよう。

彼はわが^{タート}を強調し、ゲーテにおける活動の精神にカント的实践理性の優越ばかりか、トータルな世界観による人格の統一を見いだした。

「ファウストの最も深遠な本質は、目的意識をゆるがさず、これまでも明確に活動性を目指してきた以上、その最も純粋なかたちで、いまやここに貫徹される。[Faust: 10180-10190]

この地球には

いまだわがなす余地残し

驚嘆せしむ壮挙あるべし

わが力こそただひたむきに傾注すべけれ

メフィストフェレスは、いつものことだが、ファウストの究極の動機を理解していない。彼はそこで、女傑ヘレナに吹き込まれて、ファウストが今望んでいるのは名声だ、と考える。けれどもそのことを、きっぱりたしなめて、ファウストは自分の眼中にあるものは何であるか、はっきりと言い切る。

われは統べて、占有せん

わがをもつてすべてとなす

名聞の虚しうす」(Rickert, H., 1922a, S. 171.)。

このように人格は統握されつつ、生のわがをとおして陶冶されてゆく。

つまり世界「観望」へと臨む生は、経験的人格に立脚している。「一切の真に包括的な哲学は、われわれのすべてを包括する生の哲学でなければならない」(Rickert, H., 1922b, S. 181.)。このことはリッカートの主体が完結を志向しながらも、有限の多様²⁹との相関関係にあったこととぴったり対応している。そこで生の解明のために世界観を扱わなくてはならない。かくのごとき世界観の基礎には、リッカートの価値への洞察があった。すなわち形式は超時間的であるものの、内容³⁰は歴史的に変転する。その条件のもとでの、経験的な価値哲学を構想したのである。この文脈でたとえ歴史的一回性にのみ個別化的自然科学の手続きを限定したにせよ、なお当該の価値関係には保留の態度をとっていると理解できる。つまり進化論につらなる人間の自然史的な考察は、リッカートの価値哲学のアポステリオリと切り結ぶのである。

このように見てみると準拠枠を異にししながら、カント・ディルタイ・リッカートが、自然史やアポステリオリな世界観望という問題の周縁に、共通して関心の根を下ろしていたことが分かる。

〔第二節 リッカートの主客関係〕

リッカート哲学はカント超越論哲学をヒナガタとして把握されるべきではなかろうか。そのさい、「現実」という形式が内在的領域に帰属すること、しかもヘーゲル主義に比べて、「現実」の絶対性が薄められていることに注意を要す。

「現実」について、リッカート研究者ライナー・バーストは以下のよう
に語っている。

29 ここから非完結性と感性の関係、はたまた自由のアンチノミーに思いをはせることができる。それにさいしてCohn, J.の美学を視野に入れる必要がある。Vgl. Nachtsheim, S., 1998.

30 以下の引用参照。「〔内容に関する〕開放性は、歴史的文化的生活の非閉鎖性について正当な批評を必要とすることにかかわるというのが、支配的な考え方であることは、もちろんである」(Rickert, H., 1913, S. 297.)。

「普遍学としての哲学の方法的本質は認識である。すなわち（体系に手をつけることではなく）哲学の方法的基礎づけであり、したがって認識論ということになる。それは、認識相関の二つの項、客観と主観、つまり認識される対象と認識する自我を考えに入れなくてはならず、カントがもとづけリッカートによって姿を変えた超越論的観念論へと展開を遂げた。「何か現実的であるものは、ただ思惟されうるにすぎない」(Rickert, H., 1934, S. 36.)。現実とは「たんに」思惟の形式に「限られる」。つまり各々の意識と独立な現実的なもの、つまり「超越的实在」〔を想定すること〕は認識論的な背理である。認識の対象は自存する实在 [= Realität]、換言すれば主観やその「表象」とは完全に独立なものとは見なしてはならない。つまるところ、それは価値に関係づけられた当為である…」(Bast, R. A., 1999, S. X VI. 下線イタリック。)

以下の議論ではこの引用の強調点をずらし、より实在論的な解釈を試みる。むろん超越論の心理学の見地に立てば、リッカートの当為は主観と独立ではない。超越的意義の手前に立てられた超越的当為は、意識にかかわることではじめて〔内在的に〕意義あるものとなる。それに即応して「現実」が内在的領域に定立される。経験的な「現実」が主観的意識の相関項 [Vgl. Relationismus] であることは、この局面についても言われる。これに関連して次のカントの文章が思い出される。

「現実的なものはたんに可能的なもの以上をもはや含まない。現実的な百ターレルは可能的な百ターレル以上のものをいささかも含まない」(Kant, I., A, 599/B, 627. = 5 : 287ページ。)。これをふまえてリッカートはいう、「「表象されて色がある」と「表象された色〔の概念〕」とはまるきり同一である」(GE1, S. 65/GE2, S. 119.)、と。裏返せば可能的な表象に「現実」の形式が帰属しなくては現実存在（「がある存在」）となりえない。つまり「ある」がたんに連辞として用いられる（「である存在」）なら、いかなる定立もなされず、「がある存在」を含意しない。〔カントの現実にかかるリッカートの態度表明はGE6, S. 140でなされている。現実という形式は

内容をなんら変更しないから、現実にある色と色の可能的表象は、同一であるという具合に、形式－内容図式で処理される。Vgl. GE2, S. 29.]

カントの例でいえば現実的な神の概念と可能的な神の概念は同じである。このことに徴すれば明らかなように、ただ思惟されるだけでは、現実には定立³¹されない。そこでリッカートは何か現実的な「がある」存在を認識するために、表象のみならず価値措定が必要であるとした。——本論は価値の化肉を説く点で、リッカートの「現実」の主観性を強調するバーストの解釈の域を脱している。このさいカントのいう「超越論的観念論者は、経験的実在論者でありうる」(Kant, I., A, 370. = 5 : 76ページ。)という構図が維持されていることを忘れてはならない。カントの経験的実在とはリッカートの「現実」のことである。

1900年代の前期リッカートに即して、この価値哲学の構想を分析しよう。——その〔リッカート哲学の〕変遷は以下に掲げるとくである³²。まず価値の体系の形成期 (Rickert, H., 1913からRickert, H., 1921より前：本稿ではこの形成期を中期と呼ぶ。)を挟んで、体系以前の前期と体系確立後の後期に分けられる。——中期・後期を特徴づけるのは〈心理主義からの離別・「超越的意義」 [= der transscendente Sinn, Rickert, H., 1909, S. 193. の表題] の導入〉による論理主義への傾斜である。まず前期リッカートに注目し、その後、可及的に中期リッカートに触れる。

31 カント哲学での「ある物の表象」の「定立」 [= Position] と「物自体」の「措定」 [= Setzung] とのちがいについては牧野英二, 2013, 287ページを見よ。なおリッカート認識論は、田邊元の「措定」とは、いくらかの接点をもちながら、ニュアンスが異なる。「措定判断を簡単に定義すれば、意識内容としての感覺的写象を自我の対象として措定する判断というてよからう」(田邊元, 1963, 4ページ)。リッカートの場合、純粹経験の事実ではなく知覚として、真偽の区別をもったものが自我に対して措定される。

32 九鬼一人, 1989における、前期が前体系期、後期が体系期に当たる。後期に続く晩期リッカートは、形而上的存在(形而上的世界全体)の思惟では、此岸の素材は最終的に除去されるよう、改釈される [= umdeuten]。ただし、認識といっても〔あくまで〕象徴的認識 (Vgl. Rickert, H., 1927-1929, z. B. 1927, S. 183, Z. 35-40.)であったことに注意されなくてはならない (Vgl. Zocher, R., 1963, S. 462.)。

表 リッカート哲学の時代区分

前体系期 (前期)	形成期 (中期)	体系期 (後期)	晩期 ^{註32)}
1909年より前 (『認識の対象』GE1:1892/GE2:1904)	1909年 (『認識論の二途』) から1921年より前	1921年 (『哲学体系第一部』) から1927年より前	1927年 (『叡智界の認識と形而上学の問題』) 以降

さて『認識の対象』³³⁾では、「客観という言葉」の語のイミとして、「1. 私の肉体の外側の空間的外界」、「2. 「それ自体で」現存する全世界、すなわち超越的客観」、「3. 意識内容、内在的客観」(GE1, S. 8/GE2, S. 13.) の三つが区別される。裏返せば主観は次の三つにわたる。

(1) 「私の「魂」を含んでいる [=nebst] 私の身体」

「1. 私の肉体の外側の空間的外界」については、「人は存在のあり方をめぐって、両者、すなわち身体的自我と空間的外界とを、{決して}お互い対立させられない」(GE1, S. 10/GE2, S. 15.) という。GE1, S. 10/GE2, S. 15-16で述べるように、身体的自我はせいぜい生理現象が起こる場^{トボス}である。し

33 Rickert, Heinrich, 1892, 1., Anfl., *Der Gegenstand der Erkenntnis: ein Beitrag zum Problem der philosophischen Transcendenz*, Tübingen: J. C. B. Mohr. [→GE1]/Rickert, Heinrich, 1904, 2., Anfl., *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J. C. B. Mohr. [→GE2] GE2の標題には超越論的観念論=経験的实在論への転回の方向性が見られる。

注：一. 一. 『認識の対象』第1版 (GE1)・第2版 (GE2) で共通している箇所は普通字体で表記する。

一. 一. 一. 原語の補足は大括弧 [] 内に=を記して注意を促す。

二. 一. 第1版のみで現われる箇所は中括弧{ }で括る。

二. 二. 第2版のみで現われる箇所は太字ゴチックで示す。

三. 一. 一. 第1版のゲシュペルト箇所には下線を引く。

三. 一. 二. 第2版のゲシュペルト箇所は斜体で示す。

三. 二. 一. したがって第1版・第2版に共に現われ、ゲシュペルトになっている箇所は下線を引いた斜体で示す。

三. 二. 二. したがって第1版・第2版に共に現われるが、第1版のみでゲシュペルトになっている箇所は普通字体下線。第2版のみでゲシュペルトになっている箇所は普通字体斜体。

三. 三. 一. したがって第1版のみに現われ、ゲシュペルトになっている箇所は中括弧{ }で括った下線。

三. 三. 二. したがって第2版のみに現われ、ゲシュペルトになっている箇所は太字ゴチックに斜体で示す。

たがって「外界に対立させられる」主観といっても「私の「魂」を含んでいる [=nebst] 私の身体」にすぎない (GE1, S. 7/GE2, S. 11.)。このリッカートの記述は、ディルタイが実在へと遡及するさい導きとした抵抗感覚、はたまたカントの身体的な能作 = 物自体の触発による〔構想力の〕図式の考えといくばくか通じる。

(2) 「私の精神的自我」「内在的世界」

「だが私は肉体をも」、「外界」{のなかに数え入れられるなら、／}に数えられるなら、客観は、「私の意識」と独立して把握されるすべてのもの」(GE1, S. 8/GE2, S. 12.) となる。こうして客観は拡大し、「2. 「それ自体で」現存する [=GE1ではexistiren, GE2ではexistieren] 全世界すなわち超越的客観」(GE1, S. 8/GE2, S. 13.)、「私の意識内容でも、私の意識それ自体でもないすべて」(GE1, S. 8/GE2, S. 12.) が残る。他方、主観は「生気づけられた身体」(GE1, S. 7-8/GE2, S. 11.) から「私の精神的自我」「内在的世界」(GE1, S. 8/GE2, S. 12.) に縮小する。かくして客観は「空間的外界」(GE1, S. 8/GE2, S. 13, usw.) から、精神界に対する物体界、つまり「超越的世界」(GE1, S. 8/GE2, S. 12.) に拡げられる。

(3) 「意識一般」

第三段階の客観とは意識内容³⁴となる「私の表象や、知覚、感情、意志表出」(GE1, S. 8/GE2, S. 13.) であり、第三の客観項に立つのは「3. 意識内容、内在的客観」(GE1, S. 8/GE2, S. 13.) である。すでに客観項には「私の身体」があずかっていた。この第二の客観項と対立する「主観を、なおもう一度主観と客観に分解するとき」(GE1, S. 8/GE2, S. 13.)、より限定で

34 リッカートの主観は、私の意識作用の分析を経てえられる非人称的意識作用である。大庭治夫が、リッカートの第三の主観を「内容とは区別された自己の意識」としているのは頷きえない。また大庭の「私の意識の外側にある現実(性)あるいは超越的実在(性)——のみが問題となる」という要約も後続する文章を読み飛ばしており、正鵠を射ているようには思えない (GE2, S. 14-17.)。そもそも大庭治夫, 1980, 56ページの原書書誌事項〔注5〕は『認識の対象』第2版のページ数ではなく第3版 (1915) のページ数である。第2版には「超越的実在(性)」という語はなし (GE3, S. 21には見られる)。

きる。そうした、いわゆる〔トワルドフスキーの〕対象の承認・拒斥を本質となる判断の作用 (Twardowski, K., 1982, S. 8.) にあたるのが、第三の主観項、私の〈意識作用〉である。リッカートはそれ〔作用〕を指示するのに、第二の主観と紛らわしい「意識」 [= *Bewusstsein*] (GE1, S. 8/GE2, S. 13, usw.) という語を用いる (第三の主観析出の第一段階)。

「私の」意識内容から、「内在的客観」はさらに拡張される。いいかえると、「私」はより〈広い〉「客観」のなかに繰り込まれ、「主観」領域は狭められる (形式化される)。このさい、第三の主観は「私の」という規定を帯びない純粹な無名の意識作用、つまり意識一般に変質している (第三の主観析出の第二段階)。他方、第三の客観は、GE2, S. 27, Z. 14以降、「意識一般」と相関的な「内在的客観」 [= *immanente Objekte*] (そのうちにある「現実」³⁵は第6版では現実的な内容と現実形式の複合形象である。Vgl. GE6, S. 210.)として再定義される。相関性 (ラース) が成立するのが、第一から第三までの主客関係である。——ただし意識と独立な「現実〔態〕」はあるか、と反問することを通じ、「現実」の内在性を浮かび上がらせている用法 (第2版) では、逆に形而上的「現実態」の跡が残っている³⁶。〔ち

35 現実因果作用をもって働きかける、という含意がある。ヴェーバーの現実科学の鍵概念をなす。

36 1904年の『認識の対象』第2版における「現実」の用法について言及しておきたい。「現実」は基本的に「異質的連続」と呼ばれる、概念と直観の多様との織物、すなわち経験的現実 (もとより概念〔判断〕・法則的形象に媒介されていることはいうまでもない) と一致する。「何が現実的であるという判断の、対象性」は、表象に「がある」を賦与する「判断の対象」である、と後年に定式化される (GE6, S. 148.)。〔カントの百ターレルに対応する〕「現実」が「形式」といわれるのも、この文脈である (GE6, S. 204.)。以下第2版の二箇所は内在的「現実」ならざる実在を意味し、そうしたヴィンデルバント的「現実〔態〕」に疑問を投げかけていると解しうる。〔ただし第6版では価値を「超越的現実」「超現実的現実」と呼ぶ文脈も存在する。Vgl. GE3, S. 21, GE6, S. 450.〕

「認識の対象である、認識する意識と独立な{外界}現実 [= *Wirklichkeit*] は存在するか？」 (GE2, S. 10, Vgl. GE1, S. 7.)。

「{われわれの}意識とは独立な現実 [= *Wirklichkeit*] がいったい存在するのか、という問いはしたがって、われわれに表象客観が直接与えられているという{指摘/}事実とはまるきり{あざかりは/}関係すらしないにちがいない」 (GE2, S. 15, Vgl. GE1, S. 9.)。

なみに後年の第6版では宗教 (GE6, S. XVI.)・形而上学 (GE6, S. XVIII.) が視野に入れられ、ヴィンデルバントへの回帰が見られる。その文脈で形而上的な超感性的なもの (GE6, S. XVIII.) が語られたり、非理論的文脈ではそれを超越的実在と名づける可能性が残されたりするわけである (Vgl. GE6, S. 210.)。]

この三つの主観の関係は以下のものである。第二の主客関係が最後に残ったかのように見えたが、実はそうでない。「[GE1, S. 10/GE2, S. 16] したがってあとは第二の対立の客観、すなわち私の意識の外部世界もしくは超越的世界だけが残る」にせよ、「私たちはその問いをしたがっていまや、第二の主-客対立はそもそも、先述した形式のまま維持されうるので、そして、認識する意識はそれなら内在的客観にのみ関与する [= GE1, thun/GE2, tun] か、それともはたまた超越的 [= GE1, transcendenten/GE2, transzendenten] 客観とも関与するのであろうか、というかたちに{も}直{すことができる} / {さんとするのである}。かくのごとき再定式化が行われる³⁷。

[GE1, S. 13/GE2, S. 23] 厳密に規定された意識主観の概念を獲得するには、主客の先述の三対を順に並べて考え、客観に帰属する^{まわりにおよびつらなるもの}{周延 [= Umkreis] / }範囲 [= Umfang] を徐々に拡大し、それに即応して主観に帰属するもの{周延 / }範囲を狭めてゆく。したがって、客観はすでに以前述べたように、[GE2, S. 24] まず私の身体外部の世界のみであり、次にそれに自分の [= eigen] 身体が付けくわわり、最後には、客観は各自の意識内容すべて、つまり全内在的世界となる。反対に主観から、まず私の身体が、次に全意識内容が除去される。こうして三組の異なる主客概念が袂を分かつ」。

いずれにせよ第一の主観と第二の主観の関係は、——カテゴリー・ミステイク (G・ライル著、坂本百大／宮下治子／服部裕弘訳, 1987, 特に第一章

37 GE6では第二の客観としてdie transzendenten Realitätに言及しているが、それは疑いを容れるものであり、「外的世界」ともいいがたい、としてそのあり方に留保がなされている。あくまでも超越的実在は「問題」の域にとどまる。その否定的ニュアンスについてはGE6, S. 239を見よ。

2.を見られたい)を犯さぬ限りは、概念間の特殊-普遍の包摂関係としては理解できない。では第一の主観が第二の主観より〈広い〉とは、どのような意味であろうか。そもそもリッカートは〈広さ〉の表現として、第1版ではUmkreis (GE1, S. 13.)を採用しているので、概念の厳密な包摂関係は認められない。第2版のUmfang (GE2, S. 23.)に、フッサールのホーリズムを前面に出した「範囲」(むろん空間的なそれではない)のニュアンスを読み込んではどうだろうか。この事情を考察することによって、後年のリッカートが〔特殊から普遍にいたる〕「普遍化的抽象」ではなく、〔形式的契機をとり出す〕「遊離化的抽象」 [= isolierende Abstraktion, GE6, S. 60, Vgl. Rickert, H., 1925, S. 121-162.]により「意識一般」を把握することも理解できる。

その手続きとは以下のごとくである。〔GE1, S. 14/GE2, S. 24〕さまざまな主観概念をそれらの内容の漸次的縮小という観点から考察すれば、その序列の終わりに明らかに、すべての内容と対立する意識として (第三の)超越論的主観という〔GE2, S. 24-25. 限界概念〕を切り出せるにちがいない。この考察地点から振り返ると、「私の」意識は内在的世界の一部に見いだせる。〔GE1, S. 14/GE2, S. 25〕すべての個人的なもの、したがって意識を私の意識とするすべてのものが、私の意識内容 = 客体となるかぎり、「私の」という限定は第三の〈意識作用〉から除去されなくてはならない。つまり反省が進んで、〔GE1, S. 9/GE2, S. 13〕{魂の／}意識の内容に対立する私の意識 (網掛け強調引用者)は、修正が施されている。すなわちのちには、第三の主観はさらに〔GE1, S. 14/GE2, S. 25〕主観列の最終分枝としては、無名の一般的 [= allgemeines] 非個人的意識、すなわち決して客観、つまり意識内容にな{りえ／}らない唯一者 [= 第1版ではdas Einzige, 第2版ではdas einzige] しか残{ら／}りえない」、つまり最終的な超越論的主観に変容するのである。そのことは〔GE1, S. 14/GE2, S. 26〕第三の主観は結局、{すべての客観／}意識内容に対する意識は今や、私の意識であってはならず、ただ意識一般{でありえよう。／}と名づけられよう』というかたちで

確認される。

第三の主観に相関的な第三の客観は、「GE2, S. 26 内在的存在」である「物体 [=Körper] すべてとともに、自分もしくは他人というすべての個人精神」ということになる。「GE2, S. 27 このことを調べれば、三つの主観すべてに対して、すなわち精神物理的、心理学的、認識論的主観に対して、内在的客観 [=immanentes Objekt] のみが必然的相関項 [=Korrelate] として正対する」。こうして、最小部分の「認識論的主観」を含めて、三つの主観にとっての相関項〔結び〕が「内在的存在」となる。

この見地から、超越的客観にふりかえれば、「GE2, S. 26 この三つの主観概念の定式化にさいして、超越的客観 [=認識の対象] は、どの主観概念の必然的相関概念 [=Korrelatbegriff: ラースにおけるようなそれ³⁸] のなかからも、まるまる脱落している」³⁹。すなわち第二の主観概念と相関関係にある「超越的客観」は変貌をこうむっているのである。というのも「GE2, S. 26-27 以前に設けた客観に対する主観の第二の対立」では「超越的客観」と〈意識内容として現れる私〉という「2Auf. S. 27 二つの客観概念」を一緒にしていたからである。つまり「GE2, S. 27 「私の意識」にはすでにそもそも主観－客観－関係が含まれていた」のである。いまや新たに析出された超越的客観は、第一の主観の相関概念にもなりえないし、第二の主観のそれにもなりえないし、はたまた第三の主観のそれにもなりえない。超越的客観は、ヒューム＝プライス流の現象主義の域を脱して、認識論的主観と対立・対峙の関係をなす。

38 マンハイム・ナトルプの相関主義に翳を落としている。九鬼一人, 1986参照。

39 九鬼一人, 1989, 53ページの相関概念の記述は間違っている(オン・デマンド版で訂正する機会を得た)。エルンスト・ラーズの経験主義の相関性を念頭に置いて Rickert, H., 1921, S. 44を理解すべきである。ラーズの弟子ナトルプのように、思考の中に対象に対する関係を、論理的前提として見出す相関主義〔思考はそもそも関係作用に他ならないとし、独立した相関項の想定に反対する。つまり関係は絶対者の関係ではありえない。HWPh, Bd. 8, S. 603.〕より、むしろ現象主義との親近性に注目すべきである。なお九鬼一人, 2008a, 72ページ, 12行目の「認識論的客観」→「認識論的主観」の誤りである。この場を借りて訂正しておく。なお、当該2008a資料にこの論文が依拠するところが大きいものの、大幅な修正を行なっている。

したがって「GE2, S. 26 認識論的主観」は「GE2, S. 27 すべての内在的客観に帰属する」。認識論的主観の概念を構成するには、「GE2, S. 29 それに属する意識内容の概念なしには不可能である。しかして内容とは現実〔という形式〕に適合したもの、すなわち内在的存在の現実に限定されている」。

だからもし「GE2, S. 27 認識論的主観と独立な世界」である認識の対象を問うとすれば必然的に「内在的客観」と独立なもの「についてしか問題できない [=nur ~ kann]」。そのさい「GE2, S. 28 意識一般と独立な世界が問われている」ことを貫かなくてはならず、「GE1, S. 14-15/GE2, S. 28 そうではなく、}認識論的観念論は、首尾一貫して [=第1版では consequent, 第2版では konsequent] 展開されれば主観中の個人的なものすべてが内在的客観{とまさに考えられる／}であるから、個人的主観としての超越者〔第1版では Trancendenz、第2版では Transzendenz〕がまさにはつきりとした拒斥にいたるなりゆきも、われわれは{ここから／}さらばまた明確に見てとる」。

以上が前期リッカートである。予告しておいたように、中期リッカートへの転回に触れよう。中期リッカートは「認識論の二途」中で、前期『認識の対象第二版』（GE2）のごとき判断作用の分析から超越論的当為にいたる途を、「超越論的心理学」 [=Transscendentalpsychologie] と名づける。ただし判断作用から超越の対象に向かう分析の方向を指して、「心理学」と呼ぶのである。したがってふつうの意味での心理学的分析ではない (Rickert, H., 1909, S. 190.)。さしあたりここでは、超越論的心理学の限界の指摘をとおして『認識の対象第二版』の自己批判を行っている点に注目したい。すなわち超越的当為は、べきである [=Sollen] 以上、それに服すべき主体、およびそのわざを前提としているという主張である。

「当為は純粋な価値〔つまり Bedeutung : 九鬼の挿入。リッカートなら Sinn₁ と言うかもしれない。〕ではない。それは命令であるから非存在者である。

故に当為は、これにしたがって是認しつつ隷属する存在、つまり主体を要求する」(Rickert, H., 1909, S. 209-210.)。

当為は超越的なものから垂れられるが故に、主体とかかわると変容をこうむる。超越論的心理学が到達しうる超越的当為とは、いわば認識の対象のわれわれに向いている側面であり、いっしゅの[態度決定を迫る]思想 [= Gedanke] にすぎない。それゆえ超越論的心理学とは別な途として超越論的論理学 [Transscendentallogik] を掲げる。すなわち a. 超越的価値が直接、認識可能であることを前提とし、 b. 超越性を損ねることなく、超越的価値 (文章の意義) の分析を行う方途である。しかも超越的意義 [= Sinn₁] の媒介項として、内在的意義 [= Sinn₂] のごときノエシスの契機を認めている。

ここで「内在的客観」(注: 内在的意義とは異なる。)と言っても、カント哲学の可能的経験に定位していたこと、「現実」とは、第三の「内在的客観」に他ならないことを確かめられる。すでに別稿で、この意識一般と三つの主観のホーリスティックな関係を解釈するため、Husserl, E., 1984, S. 267 における「もとづけ」⁴⁰の着想に重ねてとらえることを提案した(九鬼一人, 2007/2008, 29ページ)。

ことがらのノエマの側面はすでに述べたので(上記九鬼文献参照)、そのノエシスの側面について記述を絞ろう。内在的意義の対象的な統一が意識に現われるには、純粹意識の作用が意義を賦与しなくてはならない。すなわちドラスティックに変化する射映を、一つの対象として把握するため作用の統一を必要とする。かくして意義作用の「もとづけ」(Vgl. Husserl, E., 1984, S. 418.)の問題にいたる。意義をとおして経験対象が統握される

40 フッサールの『論理学研究』中「意義」部分が全体を「もとづけ」という事柄は次のようにも定義されている。

「もしもある a をある μ と結合するある包括的統一性においてのみ{ひとつの} § 自体が (したがって法則的には) }ある a そのものが、本質法則的には現存しうのなら、ある a そのものはある μ によるもとづけを必要としている…という」(第1版、太字ゴチック第2版、下線1版ゲシュペルト、Husserl, E., 1984, S. 267.)。とくに本稿中で想定しているのは部分が全体に対して相対的に依存している場合である。

ためには、主観がまとまっていなくてはならない。第二の主観もしくは「〔私の〕内在的世界」が、普遍的な作用たる第三の主観より〈広い〉のは、第三の主観⁴¹、つまり「意識一般」が第二の主観をもとづける部分だからである (GE1, S. 8/GE2, S. 13.)。とすれば、フッサールの⁴²、自我を構成する作用についてホーリズムを見いだせる。

もとより、可能的経験の構成はカント的「超越論的観念論」に即している。たとえば超越論的演繹の意義の「統一性」に言及する箇所を一瞥しておこう。『純粋理性批判』B版演繹論 (Kant, I., B, 131. = 4:204ページ。第一五項。) で概念の統一を質的な統一性、つまり単一性として触れたさい、次のように述べている (もちろん質的な規定ではない [もしそうならカントに範疇的直観を認める背理になる]) にせよ、ある意義づけのまとまりによる制約

41 この箇所は、先に述べた第三の主観「私の〈意識作用〉」を抽出する第一段階の文脈だが、それを前提にするときだけ、第二段階の純化された第三の主観、「意識一般」について語りうる。客観的価値と対峙するこの「意識一般」は、のちに中期・後期のリッカートにおいて主観側の極、つまり「内在的意義のあの領界」 [= jenes Reich des immanenten Sinnes] (Rickert, H., 1909, S. 220.) に読みかえられる。こうした現象学的「後退」によって、客観側に「存在」と「価値」が並立することになる (九鬼一人, 1989, 78ページ参照。)。現象学的「後退」については http://www.systemicsarchive.com/ja/b/ethische_aesthetik.html (2013年12月11日閲覧) 参照。

向井守, 1997, 151ページの「認識論的主観」の解釈は、それが論理的前提であることを、無視した議論である。リッカートのように「認識論的主観」を想定することが、意識の各私性となぜ重なるのか、理解に苦しむ。また認識論的主観は心的な「意識の成立 [= Entstehung]」に依存しない (GE1, S. 36.) のであって、それが——向井守, 1997, 152ページがいうごとく——「表象的」主観を指していないことは明白である。

42 かつて「意味 [= Bedeutung]」のカテゴリーは全体に対する生の諸部分の関係を示していて、この関係は生の本質にもとづいている」 (Dilthey, W., Bd. VII, S. 233. = 4: 258ページ。Vgl. *Ibid.* S. 243-244. = 4: 271ページ。) というディルタイの文言に引きつけ、この箇所を解釈していた。当時はノエマにのみ注意がいき、ノエシスの問題には想い至らなかった。ディルタイ論中の、「具体的な現実のなかでの体験の連関は、意味のカテゴリーにもとづいている。……これらの〔体験や追体験の〕連関を構成するものとしての体験作用 [= Erlebnis] のなかに、意味が含まれている」 (Dilthey, W., Bd. VII, S. 237. = 4: 263ページ。全体と部分の関係についてはVgl. *Ibid.* S. 195. = 4: 215ページ。Dilthey, W. Bd. VII, S. 197. = 4: 218ページ。) という箇所に誤って、リッカート (= フッサール?) との接点を見いだそうとした (九鬼一人, 2007/2008, 29ページ。連関の客観的観念論的含意についてはBd. IV, S. 177. = 8: 532ページ。)。またディルタイの真意を知るためには、「意味は特殊な形の関係であり、これは、生の内部でその部分が全体に対してもっている関係である」 (Dilthey, W., Bd. VII, S. 233-234. = 4: 259ページ。) を参照のこと。

を、権利問題として要請している。)

「結合の概念のすべてにアプリアリに先行するこうした統一は、あの単一性のカテゴリー（第一〇項）などでは断じてない。というのも、すべてのカテゴリーは判断における論理的な機能に基礎づけられているが、この機能のうちでは結合が、それゆえ与えられた諸概念の統一がすでに思考されているからである。だからカテゴリーはもう結合を前提しているのである。こうしてわれわれはこの統一を（質的な単一性として、第一二項）より高い次元に、すなわち〈それ自身が、判断におけるさまざまな概念の統一の根拠を含んでおり、それゆえ悟性の——しかもそれが論理的に使用されるにさいしてさえ——可能性の根拠を含んでいるようなもの〉のうちに求めねばならないのである」(Kant, I., B, 131.=4:204ページ。)

ちょうど人間学における^{像を創作する}創像的(dichtend)構想力が経験を組み替え、あらたに感覚表象を作りだすさい、〈テーマ〉(意義)(Bd. VII, S. 169=15:85ページにおける意義と思想 [=Gedanke] の連関)に統一がもたらされるごときが、それと符合する。このさい、創像的に文学・芸術をつくりだす構想力の統一に注目すべきである。構想力の統一についてはKant, I., Bd. XXV, 2. Hälfte, S. 858.=20:296-297ページ。なお線を引くことになぞらえられる、図式を生産する創像的構想力は、以下の箇所で「意義／^ン感官」に統一をもたらすといわれている。『人間学』の射程を知るうえでも興味深い(Vgl. Kant, I., Bd. VII, S. 167-168, S. 173-174, S. 176-178, S. 180-182, S. 185, S. 189, S. 215, S. 224, S. 240, usw. = 15:83, 91, 101-102, 109, 115-117, 153, 167, 189ページ他。)。先に参照を求めた線を引く能作を論じるB版演繹論第二四項(Kant, I., B, 154-155=4:222-224ページ。)とともに〈テーマ〉による統一は理解すべきであろう。

B版第一五項においてカテゴリーの単一性より、高い次元に求められた質的単一性に参照を求めている第一二項を見てみよう。

「客観の各認識のうちには〔第一に〕質的な単一性／^{アインハイト}統一と呼ばれうる

概念の統一がある。ただしそれは、ちょうど、たとえば観劇、演劇、物語におけるテーマの統一のように、認識の多様を総括する統一に限定されて、その概念の単一性のもとで考えられるかぎりにおいてである」(Kant, I., B, 114. = 4 : 162-163)。

こうした「意義／^シ感官」の統一に、主観のそののヒナ型を見だし、構成の「かなめ」として押さえるため、湯浅正彦の注解を援用しよう(湯浅正彦, 2003, 99-100ページ)。

この「統一」の由来するところとして「統覚の統一」が考えられるが、その統一のいう「私は思考するということが、私の表象のすべてに伴うことができるのでなければならない」という命題における「私の表象」なるものは、差当り「私は思考する」が伴いうる表象であるとしか理解のしようがない。つまりここでの「統覚の分析的統一」といった事態は、「実は「総合」によって可能」となるのであって、つまり「統覚の根源的－総合的な統一」である」。ここに意義作用の統一がかかわり、実的なものが構成される。

このようにカントは第一五項においては、「総合」が「統一」に由来するとしていたにもかかわらず、あろうことか、「統一」が「総合」によって可能となることを、口にしてしているのである。そこで第一六項の記述を見れば「統覚の統一」とは同時に、「統覚」における「主観」としての「私」の「同一性」(湯浅正彦, 2003, 101ページ)をいっていると推測できた。すなわち、「諸表象を総合する活動において、」「〈一つの〉主観についての意識も、したがってそうした自己意識の主観たる一個の「私」そのものも産出される」(湯浅正彦, 2003, 前掲箇所。)という論点を認められる。こうした自己意識は総合の作用と表裏一体をなす。だからこそ活動の現実性(actus)から言えば心理的「総合」が「統覚の統一」を可能にするのであり、活動の本質(potentia)から言えば「統覚の統一」が「総合」を可能にしているのである。かくして「超越論的な総合」において、自我は自己意識として自己を産出する。他方それと同時に、経験の「受動的な主

観」として定立することを通じて、——カテゴリーにより「構想力」⁴³の「超越論的な総合」により具体化される自己は、所産たる意識としても構成されるのである。

つまりリッカートの「意識一般」は〔主-客の〕全体のなかで「内在的意義」〔= Sinn₂〕をもつ作用契機であるとすれば、リッカートの三重の主観の関係は、カント的な文脈における主題の意義統一と通じるだろう。リッカート哲学の主観の統一は、あらかじめ〈テーマ〉という意義づけの制約を予

43 カント的な超越論の対象Xの実在は無記ゆえに、それだけでは反実在論をしりぞけられない。カントによって範疇的直観が認められなかったことを裏づけてみよう(中島義道, 2004, 151ページ以下。。「一つの経験的概念である「犬」と一定の射映(パースペクティブ)をもつ個別的な犬の像(Bild)はどのように媒介されるのか。なぜ私は眼前のこの像B₁を「犬」と判断して「猫」と判断しないのか。「B₁は犬である」と私が判断する正当な権利は何か)。

ここでのカントの問題設定は、少し考えてみると分かるように、ウサギ-アヒルの反転図形をめぐる、知覚の理論負荷性の議論と同根である。カントが答え得たのは、像が夢ではなく、実在するものとして判断できるか、という問いに対してである。彼の答えは「像」がなぜウサギではなくアヒルとして判断しうるか、に答えていない。おそらく「像」をウサギの規則にしたがって解釈すればウサギであり、アヒルの規則にしたがって解釈すればアヒルである。これが経験的概念の「図式」の適用にさいして、カントがとった答えと思われる。

知識の体系全体の調整のためには、経験はどのような「図式」の適用にも開かれている。こうした「図式」の可塑性は、概念枠に準拠しているという、デュエム=クワインターゼの洞察と通じる。

ウサギ-アヒル図形における、各々の像の把握(アスペクト把握)の場合でさえ、知覚にまとまりを与えているという意味では、「このもの」[の定立]を達成(G・ライル著・坂本百大/宮下治子/服部裕弘訳, 1987, Chap. V, 5.)している。「仕事動詞(task verb)の論理的な力とそれに対応する達成動詞(achievement verb)の論理的な力との間に見られる大きな相違の一つは、達成動詞を適用する際には何ごとかに役立つ作業活動の遂行そのもののほかに、さらにある事態が成立しているということ(をわれわれは主張しているという点にある)」(G・ライル著・坂本百大/宮下治子/服部裕弘訳, 1987, 213ページ。。「達成動詞」という表現に託せば、表象に関する再認の総合までなら、何かをなしとげているのである。直観が統一をもつさい、再認の総合までは達成しているはずだが、そのためには把握の総合も必要であり、把握は再生・再認の総合と連続している。だから低次の総合においてすら、われわれは〈何か〉=「知覚判断」を達成している。〔G・プラウス著、観山雪陽/訓覇暉雄訳, 1979, 第三篇第二章。知覚判断の諸例のなかで、たんに主観的な「〜に見える」-判断に対し、「どうも雨が降っているらしい」判断は主観的留保を伴う客観的主張を含んでいる。こうした知覚判断は『純粹理性批判』B版において超越論的に基礎づけられている。〕村田純一のように、錯誤のなかにも安定した〈地〉はあるのであって、虚偽性を暴露する〔経験の〕可能性は用意されている(村田純一, 1983, 211-215ページ。)。そうした〈地〉は、カントの場合なら再認の総合に先行する。

想していた。一方、リッカートの「超越的価値」にいたる通路である「超越的当為」は、経験的な意識内容を統制する。それは、なお実的なヒューム的心的要素と接点をもっている。心理的な感性的動機づけが規範的理由としての意識と表裏一体である所以も、そこにある。

〔第三節 リッカートの超越的当為〕

視野をひろげて、リッカート・ヴェーバー関係史のなかで動機づけ理由、規範的理由の二相（理由理論）を考えてゆきたい。さて理解社会学の創始者ヴェーバーと新カント派リッカートとの関係はさまざまに論じられてきた。この点に関する見解の相違はいろいろな「ヴェーバー理解社会学」像を産んでいる。管見の及びうるかぎり、諸家の見解が分かれるのは、とりわけ〈経験科学における認識主観の役割〉、および〈他者理解を導くところの価値・その超越性〉をめぐってである。そこで、価値の超越性とは区別して、主観の役割を押さえなくてはならない。リッカートが価値の超越性を強調しつつも「超越論的観念論」の枠内にあったこと、またヴェーバーが「神々の闘争」を説きながらも観念的な価値の超越的「妥当」（はたまた文化科学的認識の超越論的前提）を語っていること、これらを正確に理解するには、これらの認識論上の枠組みが前提となる。

以下では価値の超越性と超越論的観念論を区別したうえで、両人の思想を、理由理論の文脈で解読する試みをしたい。この作業にあたり、リッカートの『自然科学的概念構成の限界』（1902年）「歴史哲学」（1905/1907²年）を活用せねばならない。1900年代の「文化的人間」論に依拠した、両人の共通点を検討する機会はずでもった（九鬼一人, 1993）ので、ここでは詳しく述べない。

このリッカート・ヴェーバー関係を読みとく文献的資料としては、〔マリアンネの色眼鏡は割り引かれなくてはならない。Weber, Marianne, 1926,

S. 272-273.=207ページ。安藤英治, 1992, 43-54ページ⁴⁴。] ヴェーバー諸論文でのリッカートへの言及によって裏付けられる (WL, S. 3-4.=ロツシャー (一) 12-13ページ.; S. 7, fn. 1.=18ページ.; WL, S. 146, fn. 1.=客観性162-163ページ。)。それ以外にも、「思想的交流」を示す書簡が存在する (Weber, M., 1990, MWG (Ⅱ/5) S. 531, 1908/4/18・19書簡の末尾によると、ヴェーバーはリッカートによる未刊の「〈理論的価値の科学としての論理学〉の根本問題」に肯定的に言及している。しかし書簡全体の検討は本稿に続く論考に委ねる。)。ヴェーバーがとくにリッカートの大きな影響下にあったのは、1900年頃から1910年代初めにかけてである⁴⁵。

ヴェーバー理論と重なるかぎり、認識の主客に関する叙述をまとめると、1892年の『認識の対象』第1版で、リッカートは、判断において承認される「超越的当為」を、存在はしないが客観的に妥当する当為 (後には内在的意義という超越的意義への呼応) として打ち出した。「客体」は意識一般がこの「超越的当為」に即して、判断を下すことを通じ、内在的領域に構成される。こうした経験的実在論／超越論的観念論では、「客体」は観念的な価値と向かいあって定立されるのである。つまりプラトンのイデア界を、価値的妥当者の世界であるとしたロツツェをうけ、リッカートは以下のように定式化して客観的価値説を唱えた。「認識活動に客観性を授

44 マリアンネの『伝記』は禁欲対自然主義という対立項を前提として、ヴェーバーをその前者に位置づける。すなわち新フロイト主義の対極に彼を置こうとしたが、それは少なからず、彼女の性的抑圧 (ヴェーバーの女性関係・彼の母との関係) に因る「聖化」をこうむっていた。そればかりか、マリアンネのリッカートびいきを斟酌する必要がある。

45 ヴェーバー・リッカート関係系については、九鬼一人, 1993, 115-134ページ、とくに116-117ページを見よ。「ロツシャー」(1903年)から「マイヤー論文」(1906年)にいたるまで、リッカート流の学問分類に依拠していたことを伝えている。法解釈学の位置づけから、「シュタムラー」(1907年)では、イェリネク、ラスクからの影響を受けて〈規範学〉と〈経験科学〉の区別を導入したとする折原浩, 2007, 354ページの記述は、書簡に照らして再検討する必要がある。

安藤英治によれば「ヴェーバーの学問世界は、その方法論についてみても、リッカートと同一の次元にあるのではないが、しかもそのリッカートの“論理学”は最大限に利用した」という、最大公約数的な仮説がひきだせるであろう (安藤英治, 1994 (←1965), 165ページ。)

ける当為を、したがって、すべての個人的意志から独立した「妥当」を特徴づける [=charakterisieren] ために、超経験的もしくは超越的当為 [=transcendenten Sollen] と呼ぶ (Rickert, H., 1896-1902, S. 682. 下線ゲシュペルト。)。もとより当為は主体を想定するが、その背後の超越的意義は、この限定をこうむっていない。とくにそのことが明確になるのは、中期以降である。[「認識論の二途」(1909)の「超越的意義」 [=der transscendente Sinn] への言及については、九鬼一人, 1989, 第二章第二節で扱った。]

リッカートの、内在的客観に対し彼岸にある価値は、普遍的に妥当する。「価値はたんに事実として特定の共同体のすべての成員に通用するのみならず、価値一般の是認がすべての学問人 [=wissenschaftlicher Mensch] に必要かつ欠くべからざるものとして要求されるのは当然である」(Rickert, H., 1896-1902, S. 390.)。

普遍史に水路づけられ [=canalized] ながら、共同体を異にする⁴⁶「学問人」を含めた「文化的人類」にとって一定の価値が通用する (Rickert, H., 1905, S. 101.) と見なしてよからう (ニーチェ以後の意味喪失においても脱魔術化された合理的価値は妥当する?)。もちろんその形而上性を含意するわけではない (Vgl. Rickert, H., 1896-1902, S. 667.)。

しかし超越論的観念論内での難問がある。すなわち科学において記述される「客体」と、「超越的価値」である「客観」との、二重化の問題である。では、この「客体」と「客観」の関係をどう考えればよいか。ヴェーバーの議論は多くの所で、当為ないし価値判断の根拠 (客観) について、アポリアを露呈している。そのことは次の行文によく表われている。

「価値判断を外に向かって主張する企ては、当の価値への信仰を前提とする場合にのみ、意義をもつ。しかし、そうした価値の妥当を価値判断することは、信仰の問題であり、その問題と並ぶのはおそらく、生と世

46 少なくともヴェーバーの場合、文化科学の営みを誘導する価値理念が「研究者と彼の時代を支配する」(客観性S. 184=99ページ) のであって、それは、社会的条件に存している。片やリッカートでは文化価値を実現してゆく普遍的文化的人間が考えられている。

界との意義を索める思弁的な考察と解明という課題であって、この雑誌が育成を目指すイミにおける経験科学の研究対象ではありえない」(WL. S. 152. =客観性37ページ。下線ゲシュペルト。)

周知のように、彼は当為・価値観の間の相克を「神々の闘争」と呼んだ。「死闘を繰広げる神々」たる価値観は、諸個人に露わとなっている。その文脈で、価値関係的手続きを踏まえながら、価値の妥当を「信仰」の問題にするのである。もし個人主義的方向を貫くなら、ヴェーバーの価値は、心理的に^{レール}実的な超越的当為に重なるのがなりゆきだろう⁴⁷。

だがヴェーバーにしても価値は、そもそもどのようなイミで「主観的」なのか。リッカートのごとく、「認識の対象」から垂れる〈当為〉を想定していなかったか。経験的「客体」が認識主観と独立に現存するなら、どのようなイミで価値が「客観」であると考えられるのか。これらの問いをとおしてリッカートやヴェーバーの「客観」を画定してゆかなくてはならない。これは主観的とされるヴェーバーの価値と比較対照をする上で、ひいてはリッカート哲学の射程を探るためにも、避けておれない問いである。

この問いに関連するいささかのディレンマを、H・シュネーデルバッハの行文は伝えている。

「……こうして、ロツツェと新カント派は、「存在者は存在し、価値は妥当する」という定式化をした。しかしながら、同時にその価値は何かしら客観的なものでなくてはならない。現存する存在者のような仕方ではないにせよ、価値は^{エス・ギフト}有るはずである。この点で、価値問題は当初からその対象に関する存在論的ディレンマに苛まれている。というのもその対象〔価値〕は現存することなく、ただ客観的に妥当しななければならないからである」(Schnädelbach, H., 1983, S. 199. = 舟山俊明／朴順南／内藤

47 メルツのヴェーバー解釈の基本的態度は、他のヴェーバー解釈家よりもリッカートからの影響を多く見つもとることに特色がある (Merz, P. U., 1990, S. 39.)。それ故、新カント派から隔たっているかのような問題 (たとえば価値観の対立、経験的実証可能性の問題) も実は「新カント派的前提の徹底化」(Merz, P. U., 1990, S. 225.) によるものとされ、リッカートの考察と基本的に〈共約可能〉とされる。

貴／渡邊福太郎訳, 2009, 231ページ。下線イタリック。)

有りつつも、「妥当する」という述語を価値はもっている。とすればここで二重の实在論⁴⁸がもち込まれているのではないか。妥当する価値と、現実的な存在者との区別が確実であるなら、存在者が「妥当の差異」(真なる表象と偽なる表象の区別)⁴⁹のなかに現われるとは、二つの異なる次元を混同してもちこんでいる (Schnädelbach, H., 1983, S. 201. = 234ページ。)

この实在の二重性は、カントにおける超越論的对象Xの解釈、すなわちその思惟可能性、および認識不可能性に通じている。まず思惟可能性という観点から、カントの超越論的对象を考察してみよう。カント読解の錯綜するなかで、次の中島義道, 2008, 90-91ページの解釈が、いくらかの指針を与えてくれるように思われる。

「超越論的对象 (これは実際にわれわれのすべての認識にさいして常に同一のXである) の純粹概念は、さればわれわれのすべての経験的概念一般に対象への関係を、換言すれば客観的实在性を与えるものである」(Kant, I., A, 109=4 : 186-187ページ。)

この引用に続いて中島はコメントする。

「[経験的概念一般]とは[経験的对象一般]にはかならない。とすると、超越論的对象とは、経験的对象一般に实在性を与えるものです」。……「概念における再認の総合」とは、眼前の「あるもの=X」を一冊の本という対象とみなすこと」であるが、「フッサールと異なって本質直観を認めないカントにとって、Xが一義的に「本」という概念に対応する本と

48 リッカート哲学はパースペクティブ主義 (遠近法主義) の哲学であるといってみたら、どうであろう。もしそれが妥当ならば思考枠はきわめてデイルタイと似てくる。すなわち内在的存在は因果的に「説明」 [=erklären] されるが (「現実科学」、超越的当為という観点から見れば、世界は判断形象によって「理解」 [=verstehen] される。この観点の二重性は人間の自由を保証する、生の哲学的な着想である。ただしリッカートに言わせれば、現象と物自体の形而上学的「現実」の二重化はないとされる (GE6, S. 104-105。))。もしくは「二現実論」という呼称に背理を見いだす (GE6, S. 210。))。ここでいう〈二重の实在論〉は、あくまで九鬼の命名によることを注記しておく。

49 Wagner, H., 1967, S. 29-31.

いう対象であるとはかぎりません。／Xは同時に「物体」という概念に対応する物体という対象とみなせるであろうし、場合によっては「私の著作」という概念に対応する私の著作という対象とみなすこともできる。ここで、対象が何であるかは本質的な問題ではない。ここで問題になっているのは、Xをとにかく一つの物＝対象とみなすことができるということです。「……よって、超越論的对象とは「本」とみなされたかぎりの「このもの」ではなく、どのようにまとめてもよいのですが、そうまとめることを可能にする「あるもの＝X」であって、これがカントの意味する超越論的对象の正確な意味です」。

「思考」とは、〈超越論的对象X〉について「理解」されたものである。つまり、超越論的对象Xがまとめる、「今、この部屋は24度である」「冬場のこの部屋に、暖房がついている」「この部屋で凍えずに済む」……これら諸事実に対する態度が内在的意義である。さまざまに信じられた内在的意義は、諸々の判断を動機づける。実際、同一のXについて諸意義を信じているからこそ、判断の心理的説明がつく。そもそもバラバラの諸意味($X_1, X_2, X_3, X_4, \dots$)についての意義でないからこそ、判断行為を合理的に説明できるのである。

ここでカントと対比してみよう。『諸学部の争い』のなかでカントは言っている。イサクを殺すべし、という神の命令に対峙するアブラハムの振舞いを、カントは非難がましく扱った。「……アブラハムは、この神の声らしきものに対して、次のように答えねばならなかったであろう。「私が私の善い息子を殺すべきでないことはまったく確かですが、私に現われているあなたが神であることについては、確かではなく、またこれからも確かになりえないでしょう」、と」(Kant, I., Bd. VII, S. 63, Anm.=18:89ページ原注)。カントは、もし神が人間に語りかけたとしても、その語りかけている声が神のものであるか知ることは、人間にはできないという。つまり①道徳的理性への呼びかけは声のかたちをとらず、②その呼びかけがどういふ根拠をもつかについては迷わざるを得ない。

リッカートの場合、当為の声は呼びかけでないのだから、カントほどこの難局に悲観する必要もない。その声にしたがう判断は真理価値に対して合目的的で、道具的理性に従っている。たとえば私の著作であり、かつ本であり、かつ物体であり……という、どの声にしたがうべきかは謎にせよ、それら判断は〔判断〕中立性を具えている。つまり判断は〔道具理性的に〕誰によっても等し並に許されるものである。φという判断を人*j*が下すことを人*i*が許すことができるを $A_i(j)$ と表記すれば、ここで抽出される道具的理性の原則は以下のごときである。

[I-R] 道具的理性の原則 $A_i(i) \Leftrightarrow A_j(i)$

*i*がこのペンをよく書けると判断するなら、このペンをよく書けると*i*が判断することをいかなる人*j*も許すことができる場合、かつその場合に限る。つまり判断の中立性を含意する。このさい経験的欲求と信念が動機づけの定礎である。つまり時刻*t*において理由*S*が*i*による判断φの動機づけ理由を構成するのは、 Ψ したいという経験的欲求と、「*i*が判断φすれば Ψ することになるだろう」という信念とが、時刻*t*において*S*を構成するような Ψ と適切な連関を有する場合であり、そのときのみに限られる。

カントとの比較において係争点をまとめれば、①理論的理性への超越的当為の声（非明示的な呼びかけではない）は判然としている。②にもかかわらず、どの判断を下すかの段にいたれば、〔直観の多様性ゆえ〕ビュリダンのロバのごとき逡巡にいたるのである。

例えば私が、右手を挙げて横断歩道をさっさと渡るべきだと動機づけられているとして、いったいどのような角度で右手を挙げて、どんな速度で横断歩道のどのあたりを渡ればよいか迷うことに似ている。判断にさいして、くめどもつきぬ「密画作業」(大森莊蔵, 1985。)を完了できないのだから、自由な可能性が拓いている。旧聞に属するが小林道夫, 1996の言い方を借りれば、意味 [=Bedeutung⁵⁰] が一つだとしても科学は進歩とともに、多様

50 リッカートにおけるBedeutung (意味) は主に語義に対して用いられる。それは価値対立性をもたない点で「妥当の差違」を有しない。その限りで、超越論の対象*X*と

な意義に出会う。もろもろの〈意義アспект〉に差し向けられるのである。

「……科学的探究では常に、対象の与えられ方としての「意味」（フレーゲの用語では「意義」Sinn）から「指示対象」（フレーゲの用語では「意味」Bedeutung）への前進が要求されるのである。そこで、指示対象が確定されない段階では対象の理解は意味に支配されざるをえないのであるが、いったん意味と指示対象との結合が実現されるならば、今度はその意味は対象の一面として理解される。「意味は対象の一つの側面を照射するだけ」だからである。指示対象は一つであっても意味は複数あるのである」（小林道夫、1996、142ページ。下線強調。ただしカントのXと^{ベドイトゥング}意味はぴったり一致しない。）。

カントを指針とする科学論は、感覚に即応した意義の多様に正対する。良心の呼びかけに応じ、深淵の前に立つカントは、さながら無限の「密画作業」の前で逡巡するリッカートである⁵¹。そもそもリッカートを方向づけていた規範的理由は、志向される超越的意義＝フレーゲ的な意味である。意味の志向性という把握の前提について野本和幸の文章をもって語らしめよう。

「フレーゲの理論的枠組みでは、意味と意義・思想は明確に峻別され、固有名の表示対象である意味や述語の意味である概念が、思想の構成要素になることはない。しかしながら、思想は、本来、真偽を問われるべき当のものであり、真理が問題とされる論理学を含む学問においては、真偽いずれかであって第三の途はないものであるかぎり、その思想を表現する文の構成要素が、意味を欠くことは許されない」（野本和幸、2012、369ページ。）。

ここから、志向的な意味を表示するよう、实在論の三要件が要請される。

似ている。Rickert, H., 1909, S. 199-200. したがって後論での価値対立性をもつ超越的意義 [= Sinn₁] = 意味 [= Bedeutung] という解釈は、フレーゲの色眼鏡をとおした読み込みが含まれている。

51 リッカートの信仰については詳らかでないが、ゲーテのファウストの傾倒に窺われるように、プロテスタンティズム的志向をもっていたことは明らかである。

真偽を問われるべきことがらを表示する対象に即して、「①「排中律」もしくは「二値性の原理」への態度、②相互的な言語使用における「合意」への態度、③「真」なる文の「訂正可能性」（という実在論的には形容矛盾的な可能性）への態度」（大庭健, 1987, 121ページ。）という三要件がある。以下では、それを要する事情を説明しよう。

さて当為的必然性とは「一切の判断、ひいては経験も例外なく、いやしくも確実でありさえするなら、わたしたちのいう必然性を有する」（GE1, S. 61-62/GE2, S. 113.）。この必然性は、判断についての排中律を正当化する。Xについて判断されることがらの白黒を決める（Xに関する①「排中律」もしくは「二値性の原理」への態度）。ちょうどカントの超越論的对象に関する思惟のごとく〔認識不可能にせよ〕まぎれがない。

理性的存在者はその存在のあり方からして、当為の呼びかけ＝神？に必然的にしたがうべきである。たとえば内なる神の〈垂訓〉として、リッカートを手本にしたヴェーバーの「客観性」末尾の有名な箇所——「あの最高の価値理念が放つ光芒」は時間的事象の、絶えず交替してゆく有限な一部をとらえて、その折々にふれて「降り注ぐ」（WL. S. 213-214.＝客観性159ページ。）——を思い出そう。彼にとって価値は、有限的人格のもっとも深いところに存している究極的なものである（Vgl.「究極において特定の理想を基礎とする」WL. S. 149.＝客観性30ページ。；「究極の価値理念に照らした検証」WL. S. 214.＝客観性160-161ページ、他。）からこそ、「光芒」として降り注ぐ。つまりリッカートと同じく、当為は有限な人間存在が、時間内の目的（動機づけ理由）のかたちで規範的理由を仰ぎ見るのである。

「他者の現実に「感情移入」される内容といえどもはたまた「歴史的関心」の意義にもとづく「諸評価」に帰属するのであって、いい換えれば研究対象が——歴史哲学的に定式化して——「価値の実現」であるような科学の側から見ると、自己を「評価する」個体はつねに価値実現の過程の「担い手」として扱われる。かくのごとき事情から〔中略〕「感情移入」は歴史に対して有する間接的な論理的意味〔＝Bedeutung〕は与えられ

ている。](WL. S. 116.=クニース(二)93-94ページ。下線ゲシュペルト。)

ヴェーバーは、ここに見られるように、価値が化肉するかのとき「価値実現」を説く。しかも研究対象が価値の「担い手」とであると、「客体」の側に「超越的意義」が付帯するように語っている(九鬼一人, 2008, 第七章, 二参照。)。このような規範的理由、つまり客観的意味Xを根拠にして、「理解」がなされる。実際、ヴェーバー自身「学問の真理という価値」(WL. S. 213.=客観性158ページ。)を学的判断の規範的理由としてとらえ(その文脈で科学成果の「真理として「客観的」に妥当する」(WL. S. 147.=客観性26ページ。))ことを語る)、それを、思考について合意するメルクマールとしている。

価値が個を超えた言語使用に現われること(〔価値をとおした〕一面的分析が恣意的ではないこと(WL. S. 170.=客観性72ページ。客観的・普遍的な文化的意味についてはWL. S. 181.=客観性93ページ。)、有限なる存在に語りかけることは、ヴェーバーの原典から容易に読みとれる(Oakes, G., 1988, pp. 78-79, Ref. Burger, T., 1976, S. 80。))。この「経験的実在」についての指標は、「②相互的な言語使用における「合意」への態度」と一致している。

歴史家や社会学者が「有意味な連関」を「現実の諸事象」からとり出すさい、^{ユニヴェルサル}普遍的な「文化価値」との関係づけが要求されるとヴェーバーはいう(WL. S. 181.=客観性94ページ。)。彼によれば、この「文化価値」、つまり「超越的価値」は科学者共同体に限らず、普遍的に通用する。このことは、ヴェーバーとリッカート両人の共通の研究目的が裏づける。前者は『社会科学および社会政策雑誌』の課題を、「人間共同体生活の社会経済的構造がもつ一般的な文化的意味」(WL. S. 165.=客観性62ページ。Vgl. WL. S. 178.=客観性87-88ページ。下線ゲシュペルト。)の研究と言明している。それに対し、後者は1901年の小論文のなかで、「普遍の意味をもつもののみを歴史学は叙述するといえ、それ〔歴史学の普遍原理〕を一番うまく表現していることになろう」(Rickert, H., 1929, S. 743. 下線ゲシュペ

ルト。) ⁵²と述べている。つまりヴェーバーの「文化的意味」の普遍性という主張は、リッカートの発想を引きとっているのである。こうしたくんだり
が示すのは、有限の主観をより〈大きい〉価値の「普遍妥当性」の要求である。その要求は有限の主観にとって、絶えず訂正されるべき〈経験的課題〉となり、葛藤を呼びこむ(③「真」なる文の「訂正可能性」(という実在論的には形容矛盾的な可能性)への態度)——ことと対応している。

これら極めてリッカートの発想は、ヴェーバー価値観の末節ではない。

ヴェーバーは研究対象の価値関係〔ヴェーバーはここでまぎらわしい「評価」という言葉を使っている〕について、「リッカートの「歴史的
中心」という概念が必要なもののすべてを含んでいる」(WL. S. 116, fn. 2. = クニース (二) 96ページ。)という。この「歴史的
中心」が「超越的価値」を前提とする。そうしたリッカートの概念装置をヴェーバーは引き受けている。

「この〔価値の実現という〕語によって——リッカート前掲書(『限界』)の最終章の論述がまったく疑いを容れないにもかかわらず、ときおり考えられているように——「絶対者」が経験的事実として「実現すること」を「客観的に」「達成せんとする」世界過程や、一般的に何か形而上的なものが、いかなる意味においても考えられているわけではない」(WL. S. 116, fn. 1. = クニース (二) 96ページ。下線ゲシュペルト。)

ヴェーバーがここで疑義のないと断言している『限界』最終章では、心理主義的観点から見れば、「現実」は「現象」となり、形而上的観点から見れば「絶対的存在」になる旨が記された。これらの見方を回避する術として、認識論的主観は個人的主観からも、絶対的主観からも隔離されている (Vgl. Rickert, H., 1896-1902, S. 667.)。先に見たように、その「対象」⁵³

52 Rickert, H., 1901. の仏語小論文「歴史のなかの四種類の普遍」からの引用。後に Rickert, H., 1929, 5Auf. に所収された。

53 九鬼一人, 2003, 72ページでは「対象」ではなく、「相関概念」となっている。認識論的主観の相関概念は「超越的価値」ではなく、「現実」つまり内在的客観である。訂正しておく。(WL. S. 53, fn. 1. = クニース (一) 119ページ.; WL. S. 251-254. = 文化

が心理的でもなく、さりとして形而上的でもない「超越的価値」・「客観」である (Vgl. Rickert, H., 1896-1902, S. 682.)。

おそらく形而上的なものを導入せずとも、完全に合理化が可能でありさえすればよい。誰でも本当にそうだと信じることを仮想する意味の实在論⁵⁴——主観的普遍性の原理 [s-A] と呼んだ方が適切かもしれない——を信じているのであろう。すなわち ϕ という判断を人 j が下すことを人 i が許すことができるを $A_i(j)$ と表記し、事実 F を人 i が信じていることを $B_i(F)$ と記すとすれば、

[s-A] 主観的普遍性の原則 $B_i(A_i(i) \Leftrightarrow A_j(i))$

これは人 i が ϕ と判断することをいかなる j でも認めると i が確信しているということである。たとえば i がこの縄を蛇だと誤認しているという可能性を留保するにもかかわらず、本当は縄であると i が判断することを行なってよいのは、 i がこの判断を行うことをいかなる j も許すことができる場合、かつその場合に限ると〔価値合理主義者の一亜種をなす非帰結主義者 (九鬼一人, 2011)〕 i が信じているのである。つまり一定の内包の志向性を許容することである。〔論文末、補足参照。〕

志向性ということで以下を考えている。「われわれは、事象を「自体所

科学155-158ページ。)

54 これらからヴェーバーのリッカートへのコミットメントが当為という心理現象と理想的価値 (規範的理由) の客観説との双方に関与していたと結論づけたい。しかしながら、リッカートに見るべきは、いちはやい心理主義的傾向の払拭ではない。

当為現象ということがらが、論理的な合理性のみによって理解可能であるとは考えない。心理的な過程の説明にも依拠しなくては、人がなぜ誤謬に対する自由に開かれているのか、を説明しえない。たとえば1892年の『認識の対象』第1版で、「超越的当為」を語っていることは両側面の中道をゆくものであったことを示している (GE1, S. 69)。はたまた第2版序文では、ドイツ哲学が「心理主義的方向」と「形而上学的方向」の間をさまよっていることに不満をもらしているのは (GE2, S. vf.)、リッカート哲学の両義的な性格の消息を伝えるものであろう (新カント学派の心理主義については、たとえば野本和幸, 2012, 36-37ページなどを見よ)。

「リッカートの研究の本質的な観点」に従ったヴェーバーも、価値の形而上学的解釈をとったとは考えにくい。ヴェーバーが心理主義と論理主義のアマルガム内にあったと解するとき、兩人ともども、当為という概念は「文化科学」的認識にとって中心的位置を占めることになる。

与性のあり方で、「本源的」「明証的に」把捉して、事態そのものをとらえることもできる。しかしながらその一方で、「事象を「空虚」な仕方、未規定的に、「単に志向」することもできる」(村田純一, 1992, 203ページ)。後者はときとして、Xとは独立な内在的意義によって志向すると考えられることもあるが、むしろ端的にXの把捉の仕方が、前者と異なっているものと理解することも可能なのである。そのイミでは、超越的当為は意味(X)と独立に、当為必然性をもつとは考ええない。主観的には普遍的であれと欲せば、超越的当為にしたがわざるをえない。その主体はあくまで理性的存在者を想定しており、(明瞭に当為を意識しつつ)病的な錯誤を犯したり当為に違背したりする主体などではありえない。権利問題としては、錯誤は逸脱現象と見なされることになる。

小括—ヴェーバーの経験的实在論への移行行き

そもそもXとは科学の進歩・学問の進歩とともに、いくらでも微細な「密画」を描きこむことが可能な、有限な判断主体には、大きすぎる価値を帯びている。それは意味 [=Bedeutung] として対峙するのみで、意義 [=Sinn₂]⁵⁵の「解釈」に開かれている。

Xは〔科学的に〕実在するといえども、「密画」に対して留保がある。つまり意義は決まっていなくても、同一の対象Xを扱うことができる。文の意義 = 「思想」 [=Gedanke] とは物でも心でもない。フレーゲは「そもそも真理かどうか問い得るもの」を「思想」と定義し (Frege, G., 1986 (←1918), S. 58 (60).)、「疑問文の意義となりうるもの、それを思想と名付ける」 (Frege, G., 1986 (←1919), S. 143 (145).) という。

55 ただしフレーゲの「価値」とリッカートの「価値」はちがう (ヴィンデルバントの真理価値が、いくらかフレーゲの真理値に翳を落としているかもしれない。Vgl. Gabriel, G., K., 1986, S. 94-96.)。ただし認識論の客観的項を〔心的でも物的でもない〕第三領域ととらえる点でフレーゲとリッカートは足並みをそろえる (*loc. cit.* pp. 100-101.)。フレーゲのカッシーラーへの影響関係は、Pätzold, D., 1998, S. 158-160の指摘するとおりである。Gabrielによるロツェーフレーゲ関係論の検討は別の機会に譲る。

「思想とは外界の物でも表象でもない。第三領界が承認されなくてはならない」(Frege, G., 1986 (←1918), S. 58 (69).)。この文脈で言われるように、内在的意義は心でも物でもない。しかもそれを、——反対する多くの異議があることは承知の上で飯田隆, 1987, 112ページにならって——文が真となる条件、すなわち真理条件と同一視したい。

「われわれの記号から適正な仕方で構成された名前 [=Name] には、単に意味のみならず、また一つの意義が帰せられる。真理値のこうした名前のいずれも、一つの意義、思想を表現する [=ausdrucken]。われわれの取り決め [=Festsetzung] によって、真理値名が、いかなる条件下で [=unter welchen Bedingungen] 真を意味する [=bedeuten] のかが、確定される。これらの名前の意義、すなわち思想、とは、これらの条件が充足 [=erfüllen] されているという思想である」(Frege, G., 1966 (←1893), sec32.)。

つまり任意の文について、それを理解するということは、その文がどのような条件の下で真と見なされるかを知ることである。文（判断）の真理へ態度をとることである。それと歩みをそろえてヴェーバーはいう。「歴史的概念の「本当の」「真の」意義を確定しようとする試みは、つねに繰り返され、しかも決して完結しない。……〔文化科学研究の進歩の〕結果は、現実を把握しようとする概念の、絶えざる変形の過程である」(WL. S. 206-207. =客観性145-146ページ。)と。知識を真と見なす条件の追究は、決して完結しない。ヴェーバーもまた「密画作業」の前で逡巡するリッカー

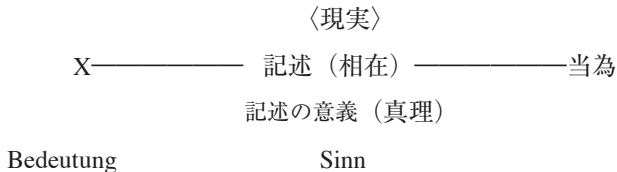


図 1

トの学徒である。同一のXに関する超越する〈垂訓〉が有限者に下され、判断・意味づけ「作業」となる。大いなる「実在の声」(?)が、動機的理由である「超越的当為」——それが意義である——なら、規範的理由を与える「実在」(くり返し注意しておくがカントの超越的对象Xとはびつたり重ならない。)は、さしづめ意味(「超越的意義」)である。この「実在」は「超越論的な」(自己に対する)主観的普遍性の原理という光のもとで明らかにされるであろう。文化科学的「客体」は、超越論的对象Xを前提にしてのみ定立される。一方で、動機づけ理由となるリッカートの説明原理は、ヴィンデルバントから継承した観念論によって基幹構図が用意されたのである。

補足：非帰結主義者の場合、次の誠実性の原理 [E] も成立するかもしれない。

[E] 誠実性の原理 $B_i(A_i(i) \Leftrightarrow A_j(j))$

参考文献〔ローマ数字の巻番号のみ後置する。〕

- 安藤英治, 1992, 『ウェーバー歴史社会学の出立』 未来社。
 安藤英治, 1994 (←1965), 『マックス・ウェーバー研究』 未来社。
 Arnorltd, Emil, 1908, *Gesammelte Schriften*, Bd. IV: *Kritische Excuse im Gebiete der Kantforschung Teil. I*, Berlin: B. Cassirer.
 Bast, Rainer A., 1999, "Rickerts Philosophiebegriff", Hrsg. von Rainer, A. Bast, in: *Philosophische Aufsätze/Heinrich Rickert*, Tübingen: J. C. B. Mohr, S. XI-XXXI.
 Bollnow, Otto Friedrich, 1982, *Studien zur Hermeneutik*, Bd. I, Freiburg/München: K. Alber.
 Burger, Thomas, 1987(←1976), *Max Weber's Theory of Concept Formation*, Durham: Duke University Press.
 E・カッシーラー 著・山本義隆/村岡晋一訳, 1996, 『認識問題4 近代の哲学と科学における』 みすず書房。
 Dilthey, Wilhelm, 1924 (←1890), "Beiträge zur Lösung der Frage vom Ursprung unseres Glaubens an die Realität und seinem Recht", in: *Die Geistes Welt, Einleitung in die Philosophie des Lebens*, I. Hälfte, in: *Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Leipzig und Berlin: B. G. Teubner, Bd. V, S. 90-138. = 山本幾生訳, 2003, 「外界の実在性論考」『デイルタイ全集 第三巻 論理学・心理学論集』 法政大学出版局, 479-537ページ。
 Dilthey, Wilhelm, 1974 (←1906), "Die Jugendgeschichte Hegels", in: *Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Leipzig und Berlin: B. G. Teubner, Bd. IV, S. 1-187. = 水野健雄訳, 2010, 「ヘーゲルの青年時代」『デイルタイ全集 第八巻 近代ドイツ精神史研究』 法政大学出版局, 327-544ページ。
 Dilthey, Wilhelm, 1977 (←1911), "Die Typen der Weltanschauung und ihre Ausbildung in den

- metaphysischen Systemen”, in: *Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B. G. Teubner/Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, Bd. VIII, S. 75-118. = 菅原潤訳, 2010, 「世界観の諸類型と、形而上学的諸体系におけるそれらの類型の形成」『デイルタイ全集 第四卷 世界観と歴史理論』法政大学出版局, 485-534ページ。
- Dilthey, Wilhelm, 1979 (←1883), 8., Aufl., *Einleitung in die Geisteswissenschaften, Versuch einer Grundlegung für das Studium der Gesellschaft und der Geschichte*, in: *Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B. G. Teubner/Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, Bd. I. = 牧野英二編集/校閲, 2006, 「精神科学序説第一巻——社会研究と歴史研究の基礎づけの試み」『デイルタイ全集 第一巻 精神科学序説第一巻』法政大学出版局, 3-480ページ。
- Dilthey, Wilhelm, 1979 (←ca. 1910), *Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften, Entwürfe zur Kritik der historischen Vernunft*, in: *Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B. G. Teubner/Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, Bd. VII, S. 191-292. = 西谷敬訳, 2003, 「精神科学における歴史的世界の構成の続編の構想 歴史の理性批判のための草案」『デイルタイ全集 第四卷 世界観と歴史理論』法政大学出版局, 209-330ページ。
- Dilthey, Wilhelm, 1982 (←ca. 1880-1890), *Ausarbeitung zum zweiten Band der Einleitung in die Geisteswissenschaften, Viertes bis sechstes Buch*, in: *Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: Teubner/Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, Bd. XIX, S. 58-295. = 大石学訳, 2003, 「『精神科学序説』第二巻のための完成稿——第四部から第六部まで」『デイルタイ全集 第二巻 精神科学序説II』法政大学出版局, 121-426ページ。
- Dilthey, Wilhelm, 1982 (←ca. 1880-1890), *Leben und Erkennen, Ein Entwurf zur Erkenntnistheoretischen Logik und Kategorienlehre*, in: *Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: Teubner/Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, Bd. XIX, S. 333-388. = 伊藤直樹訳, 2003, 「生と認識 - 認識論的論理学とカテゴリ-論のための草稿」『デイルタイ全集 第三巻 論理学・心理学論集』法政大学出版局, 559-633ページ。
- Frege, Gottlob, 1966 (←1893), *Grundgesetze der Arithmetik Begriffsschriftlich abgeleitet von G. Frege*, (Olms paperbacks, Bd. 32), Hildesheim: G. Olms.
- Frege, Gottlob, 1986 (←1918), 3., Aufl., *Der Gedanke: eine logische Untersuchung*, in: *Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus I, 2*, in: *Logische Untersuchungen*, Stuttgart: Teubner/Göttingen Vandenhoeck und Ruprecht.
- Frege, Gottlob, 1986 (←1919), 3., Aufl., *Die Verneinung: eine logische Untersuchung*, in: *Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus I, 3/4*, in: *Logische Untersuchungen*, Stuttgart: Teubner/Göttingen Vandenhoeck und Ruprecht.
- Gabriel, Gottfried K., 1986, “Frege als Neukantianer”, in: *Kant-Studien*, Bd. 77, S. 84-101.
- ノルベルト・ヒンスケ著・石川文康訳, 1985, 『現代に挑むカント』晃洋書房。
- ノルベルト・ヒンスケ著・宮島光志訳, 1996, 「諸学とその目的——カントが体系理念に与えた新たな定式」『批判哲学への途上で』有福孝岳・石川文康・平田俊博編訳, 晃洋書房, 119-146ページ。
- 飯田隆, 1987, 『言語哲学大全 I』勁草書房。
- 岩隈敏, 1992, 『カント二元論哲学の再検討』九州大学出版会。
- Kant, Immanuel, 1867-68, *Immanuel Kant's sämtliche Werke, in chronologischer Reihenfolge*, Hartenstein, Gustav, (Hrsg.) Leipzig: Leopold Voss, Bd. II.
- Kant, Immanuel, 1904 (←1781A/1787B), *Kritik der reinen Vernunft*, in: Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. III・IV. = 有福孝岳訳, 2006. 『純粹理性批判 上・中・下』『カント全集』

- 岩波書店, 第4~6巻。
- Kant, Immanuel, 1905(←1757), *Entwurf und Ankündigung eines Collegii der physischen Geographie*, in: Hrsg. von Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd II, S. 1-12. = 植村恒一郎訳, 2000, 「自然地理学講義要綱および公告」『カント全集』岩波書店, 第2巻, 259-272ページ。
- Kant, Immanuel, 1908(←1788), *Kritik der praktischen Vernunft*, in: Hrsg. von Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd V. = 坂部恵/伊古田理訳, 2000, 『実践理性批判』『カント全集』岩波書店, 第7巻, 117-358ページ。
- Kant, Immanuel, 1911(←1783), *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*, in: Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. IV. = 久呉高之訳, 2006, 『プロレゴメナ』『カント全集』岩波書店, 第6巻, 181-372ページ。
- Kant, Immanuel, 1913 (←1790), *Kritik der Urteilskraft*, in: Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. V. = 牧野英二訳, 2000, 『判断力批判 下』『カント全集』岩波書店, 第9巻。
- Kant, Immanuel, 1917 (←1798), *Der Streit der Facultäten*, in: Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. VII. S. 1-116. = 角忍/竹山重光訳, 2002, 『諸学部の争い』『カント全集』岩波書店, 第18巻, 1-156ページ。
- Kant, Immanuel, 1917 (←1798), *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, in: Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. VII. S. 117-333. = 渋谷治美訳, 2003, 『実用的見地における人間学』『カント全集』岩波書店, 第15巻, 1-332ページ。
- Kant, Immanuel, 1997 (←1781/1782), *Der Vorlesung des Wintersemesters 1781/1782* [?], in: Hrsg. von der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Walter de Gruyter, Bd. XXV. 2Halbte. S. 849-1203. = 中島徹訳, 2002, 『人間学講義』『カント全集』岩波書店, 第20巻, 287-434ページ。
- Kaulbach, Christian Friedrich, 1972, *Einführung in die Metaphysik*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Kaulbach, Christian Friedrich, 1990, *Philosophie des Perspektivismus*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Kim, Soo Bae, 1994, *Die Entstehung der Kantischen Anthropologie und ihre Beziehung zur empirischen Psychologie der Wolffschen Schule*, Frankfurt am Mein: Peter Lang GmbH, Europäischer Verlag der Wissenschaften.
- 小林道夫, 1996, 『科学哲学』産業図書。
- Krijnen, Christian, 2001, *Nachmetaphysischer Sinn, Eine problemgeschichtliche und systematische Studie zu den Prinzipien der Wertphilosophie Heinrich Rickerts, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Bd. 16, Würzburg: Königshausen & Neumann.
- Kuhn, Hermann, 1973, "Das Gute", in: Hrsg. Krings, H., /Baumgartner, H. -M., /Wild, C., *Handbuch philosophischer Grundbegriffe*, Bd. 3, München: Kösel-Verlag, S. 657-676.
- 九鬼一人, 1986, 「マンハイムとリッカートの接点」『社会思想史研究』第11号, 162-176ページ。
- 九鬼一人, 1989, 『新カント学派の価値哲学』弘文堂。
- 九鬼一人, 1993, 「ヴェーバーとリッカート——価値論的視座から見た対照」『思想』岩波書店, 第831号, 115-134ページ。
- 九鬼一人, 2003, 『真理・価値・価値観』岡山商科大学。

- 九鬼一人, 2006, 「新カント派とカント」 坂部恵・有福孝岳・牧野英二編『カント全集別巻』岩波書店, 81-96ページ。
- 九鬼一人, 2007/2008, 「化肉した価値——リッカートの「現実態」への諷」日本デルタイ協会『デルタイ研究』第19号, 25-41ページ。
- 九鬼一人, 2008a, 「リッカート認識論における現実態（第一回）」『岡山商大論叢』第43巻第3号, 53-77ページ。
- 九鬼一人, 2008b, 「現象学的理想型解釈の理路」橋本努・矢野義郎訳『日本マックス・ウェーバー論争「プロ倫」読解の現在』ナカニシヤ出版, 169-186ページ。
- 九鬼一人, 2011, 「目的合理主義者と非帰結主義者」杉田正樹他『平成19年-22年科学研究費助成金・基盤研究（B）経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築』, 研究協力, 62-74ページ。
- 牧野英二, 1994, 「トボス論の試み」『カント——現代思想としての批判哲学』情況出版。
- 牧野英二, 2004, 「デルタイ哲学の現代的意義——歴史的理性批判の射程——」『法政大学文学部紀要』四九号, 法政大学文学部, 1-24ページ。
- 牧野英二, 2013, 「『持続可能性の哲学』への道 ポストコロニアル理性批判と生の地平』法政大学出版局。
- Makkreel, Rudolf A., 1975, *Dilthey: Philosopher of the Human Studies*, Princeton: Princeton University Press. = ルードルフ・A. マックリール, 大野篤一郎/田中誠/小松洋一/伊藤道生訳, 1993, 『デルタイ 精神科学の哲学者』法政大学出版会。
- 的場哲朗, 2001, 「哲学の人間学とデルタイ——〈学問と生の二元論〉を克服するために」西村皓/牧野英二/舟山俊明編『デルタイと現代 歴史的理性批判の射程』法政大学出版局, 305-319ページ。
- Merz, Peter-Ulrich, 1990, *Max Weber und Heinrich Rickert: die erkenntniskritischen Grundlagen der verstehenden Soziologie*, Würzburg: Königshausen & Neumann.
- 村田純一, 1983, 「知識と実践——知覚経験と科学的経験——」『思想』岩波書店, No. 712, 208-232ページ。
- 村田純一, 1992, 「指示と意味——志向性の諸形態——」『情況—「現象学—越境の現在」』情況出版, 194-215ページ。
- Nachtsheim, Stephan, 1998, “Systemstellung und Bedeutung des Ästhetischen in der Philosophie des Neukantianismus”, in: Krijnen, C. /Orth, E. W., (Hrsg.) *Sinn, Geltung, Wert., Neukantianische Motive in der modernen Kulturphilosophie, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Bd. 12, Würzburg: Königshausen und Neumann, S. 35-50.
- 中島義道, 1987, 「超越論的身体」『科学基礎論研究』第68号, 39-44ページ。
- 中島義道, 2000, 『空間と身体』晃洋書房。
- 中島義道, 2004, 『カントの自我論』日本評論社。
- 中島義道, 2008, 『カントの読み方』ちくま新書。
- 野本和幸, 2012, 『フレーゲ哲学の全貌 論理主義と意味論の原型』勁草書房。
- Oakes, Guy, 1988, *Weber and Rickert——Concept Formation in the Cultural Science*, Cambridge: The MIT Press.
- 大庭治夫, 1980, 『文化価値と政治経済』文真堂。
- 大庭健, 1987, 「メタファー・リアリズム・コミュニケーション」『現代思想』1987vol. 15-6, 116-135ページ。
- 大森荘蔵, 1985, 『知識と学問の構造：知の構築とその呪縛』日本放送出版協会。
- 折原浩補訳, 2007, 「解説」マックス・ヴェーバー著『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫。
- Orth, Ernst Wolfgang, /Holzhey, Helmut H., (Hrsg.) 1994, *Neukantianismus, Perspektiven und*

- Problem, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Bd. 1, Würzburg: Königshausen und Neumann.
- Pätzold, Detlev, 1998, "Zum 'Sinn'-Begriff in Cassirers Philosophie der symbolischen Formen", in: Krijnen, C., /Orth, E. W., (Hrsg.) *Sinn, Geltung, Wert., Neukantianische Motive in der modernen Kulturphilosophie, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Bd. 12, Würzburg: Königshausen & Neumann, S. 157-168.
- G・ブラウス. 著, 観山雪陽 / 訓覇暉雄訳, 1979, 『認識論の根本問題——カントにおける現象概念の研究——』 晃洋書房。
- Rickert, Heinrich, 1892, *Der Gegenstand der Erkenntnis: ein Beitrag zum Problem der philosophischen Transcendenz*, Tübingen: J. C. B. Mohr. 略号→ [GE1]
- Rickert, Heinrich, 1896-1902, *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1904, 2., verbesserte Aufl., *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J. C. B. Mohr. 略号→ [GE2]
- Rickert, Heinrich, 1905, "Geschichtsphilosophie", in: *Die Philosophie im Beginn des 20 Jahrhunderts, Festschrift für Kuno Fischer*, Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Bd. II, 51-135.
- Rickert, Heinrich, 1907, 2., Aufl., "Geschichtsphilosophie", in: *Die Philosophie im Beginn des 20 Jahrhunderts, Festschrift für Kuno Fischer*, Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, 321-422.
- Rickert, Heinrich, 1909, "Zwei Wege der Erkenntnistheorie, Transscendentalpsychologie und Transscendentallogik", *Kant-Studien*, X IV, S. 169-228.
- Rickert, Heinrich, 1910, 2., Aufl., *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1912, "Urteil und Urteilen", *Logos*, Bd. III, S. 230-245.
- Rickert, Heinrich, 1913, "Vom System der Werte", *Logos*, Bd. IV, S. 295-327.
- Rickert, Heinrich, 1915, 3., völlig umgearbeitete und erweiterte Anfl., *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J. C. B. Mohr. 略号→ [GE3]
- Rickert, Heinrich, 1921, *System der Philosophie, Allgemeine Grundlegung der Philosophie*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1921, 3・4., Aufl. (← 1896-1902), *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1922a, "Goethes Faust und der deutsche Idealismus", Für die Zeitschrift 'Kaizo', in: *Kaizo*, Bd. 4, Tokio, Nr. 4, S. 170-184.
- Rickert, Heinrich, 1922b, 2., Aufl., *Die Philosophie des Lebens*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1925, "Vom Anfang der Philosophie", *Logos*, Bd. XIV, S. 121-162.
- Rickert, Heinrich, 1927-1929, "Die Erkenntnis der intelligibeln Welt und das Problem der Metaphysik", *Logos*, Bd. 16, S. 162-203, Bd. 18, S. 36-82.
- Rickert, Heinrich, 1928, 6., Aufl., *Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J. C. B. Mohr. 略号→ [GE6]
- Rickert, Heinrich, 1929, 5., Aufl., *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1934, *Grundprobleme der Philosophie, Methodologie, Ontologie, Anthropologie*, Tübingen: J. C. B. Mohr.

- G・ライル著, 坂本百大／宮下治子／服部裕幸訳, 1987, 『心の概念』 みすず書房。
- 坂部恵, 1976, 『理性の不安』 勁草書房。
- Schnädelbach, Herbert, 1983, *Philosophie in Deutschland 1831-1933*, Frankfurt am Main: Suhrkamp = 舟山俊明／朴順南／内藤貴／渡邊福太郎訳, 2009, 『ドイツ哲学史1831-1933』 法政大学出版会。
- M・スミス著, 樫則章／林芳紀／江口聡／成田和信／伊勢田哲治訳, 2006 (←1994), 『道徳の中心問題』 ナカニシヤ出版。
- 田邊元, 1963, 『田邊元全集 第一巻』 筑摩書房。
- Twardowski, Kazimierz, 1982 (←1894), *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen, Eine psychologische Untersuchung*, München/Wien: Philosophia Verlag.
- 植村恒一郎, 1989, 「主観性と客観性」 カント研究会編 『現代カント研究 I 超越論哲学とは何か』 理想社, 78-99ページ。
- 植村恒一郎, 1993, 「カントにおける『直観の形式』」 竹市／坂部／有福編 『カント哲学の現在』 世界思想社。
- Wagner, Hans, 1967, 2., unveränderte Aufl., *Philosophie und Reflexion*, München/Basel: Ernst Reinhardt.
- Weber, Marianne, 1926, *Max Weber: ein Lebensbild*, Tübingen: J. C. B. Mohr. = マリアンネ・ヴェーバー著／大久保和郎訳, 1963, 『マックス・ウェーバー』 みすず書房。
- Weber, Max, 1973, 4., Aufl., *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J. C. B. Mohr. 略号→ [WL]
- Weber, Max, 1973 (←1903-1906), 4., Aufl., “Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie”, in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J. C. B. Mohr, S. 1-145. = 松井秀規訳, 1955/1956, 『ロッシヤーとクニース』 (一)・(二) 未来社。
- Weber, Max, 1973 (←1904), 4., Aufl., “Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher und Sozialpolitischer Erkenntnis”, in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J. C. B. Mohr, S. 146-214. = 富永祐治・立野保男・折原浩補訳, 2007 (←1998), 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』 岩波文庫。
- Weber, Max, 1973 (←1906), 4., Aufl., “Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik”, in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J. C. B. Mohr, S. 215-290. = 森岡弘通訳, 1965, 「文化科学の論理学の領域における批判的研究」 『歴史は科学か』 みすず書房。
- Weber, Max, 1990, *Max Weber Gesamtausgabe*, Tübingen: J. C. B. Mohr, Bd. II / 5.
- 山本道雄, 2008, 『改訂増補—カントとその時代—ドイツ啓蒙思想の一潮流』 晃洋書房。
- 湯浅正彦, 2003, 『存在と自我—カント超越論哲学からのメッセージ』 勁草書房。
- Zocher, Rudolf, 1959, *Kants Grundlehre ihr Sinn, ihre Problematik, ihre Aktualität*, Erlangen: Universitätsbund.
- Zocher, Rudolf, 1963, “Heinrich Rickert”, *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Bd. 17, S. 457-462.